

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 109 号

鵠沼海岸の蜃気楼	宮崎 奉之…	1
鵠沼と小泉八雲	有田 裕一…	12
宝治合戦とその後の三浦氏	小池 清志…	16
内藤千代子の印税	杉本 辰夫…	27
エッセー		
くげぬま断章(Ⅸ) 河童忌前のある日に	山上 英男…	30
史跡めぐり訪問記		
寒川文書館と準四国八十八ヶ所のうち寒川地区札所…	中島 明…	33
Coffee Break		36
『阿部昭の鵠沼風景』福地誠一の写真を重ね往年の鵠沼を再現		38
昭和35年頃の鵠沼風景 砂ばかりの記憶	守谷 俊博…	53
特別展		
馬込文士村 —あの頃、馬込は笑いに充ちていた—	土岐 臣道…	55
今井達夫遺稿 ⑭		
『死者来訪』	今井 達夫…	56
活動の記録（平成26年4月～9月）	総 務 担 当…	65
編集後記		68

『新編相模国風土記稿』（天保 12 年、1841）に、「鵠沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠 沼 を 語 る 会 発行

鵜沼海岸の蜃気楼

宮崎 奉之(鵜沼神明在住)

1. 「蜃気楼」との出会い

平成 20 年 1 月 1 日、日没も間近の鵜沼海岸、引地川河口で私は写真を撮っていた。橙黄色の太陽光が雲間から射した海の先にいくつかの島が目に入った。望遠レンズを通して見ると、島（写真 1）は海上に浮かんでいるように見えた。その伊豆半島の方向には、「島」はないはずであった。島がなぜあるのか、島がなぜ浮かぶのか、と素朴な疑問をもった。浮かんだ島が「浮島」と呼ばれる「蜃気楼」（注 1）ではないかと意識した。後日、再び引地川河口から、サーファーと漁船を撮影していた。漁船をじっと見ると、海岸に近い漁船は正常な形であるのに、遠くの漁船はワニが口を開けたような不思議な形（写真 2）をしていた。この異様な形の漁船も「蜃気楼」ではないかと思った。

この時から、冬場、鵜沼海岸に撮影に行く度に、遠くの風景の中から「蜃気楼」を探し始めた。探す目で眺めると、遠くの島、半島、船、波、人、建物、海岸など、水平線上のもの全てが、浮かび、逆転した反転像（虚像）を結ぶ「蜃気楼」となることに気付いた。以来、「蜃気楼」をテーマに、鵜沼海岸を中心として、写真を撮り続けている。

2. 大正時代の「蜃気楼」の新聞記事

「鵜沼海岸の蜃気楼」について調べると、大正時代、新聞（注 2）に大きく取り上げられていた。大正 15（1926）年 10 月 2 日午後、高木和男氏（横濱高等工業学校＝横浜国立大学工学部の前身の学生）は、鵜沼海岸（引地川河口）の砂浜に置いてある漁船が浮き上がって見える現象（蜃気楼）を撮影し、さらに、10 月 21 日に物理学の加藤述之教授と共に同じ場所を訪れ、再度、写真撮影に成功したという。この蜃気楼の写真が 10 月 27 日の横濱貿易新報（神奈川新聞社の前身）、28 日の東京朝日新聞に掲載された。写真では、手前に引地川、砂浜、舟があり、この舟と砂浜の間に空間があり、そこが湖水のような状態になって、舟が逆さまに映っているという。撮影者の高木和男氏（故人）は、鵜沼海岸に住み、後年、「鵜沼を語る会」の会長を歴任された方である。

私が蜃気楼に気づいて、最初に撮影した場所と、高木和男氏の撮影した場所とが、奇しくも極めて近い場所であるのは何かの因縁のようである。なお、現在の引地川河口と当時の河口とは、河川の改修が行われて位置が異なっている。

3. 芥川龍之介と蜃気楼

大正 15 (1926) 年 10 月 27 日、横濱貿易新報、28 日の東京朝日新聞に「蜃気楼の出現」の記事（注 2）から、鵠沼海岸の海浜は人々で大変な賑わいとなったという。芥川龍之介はこの新聞記事を見て、昭和 2 (1927) 年（死の 5 ヶ月前）に短編「蜃気楼——或いは『続海のほとり』」（注 3）を執筆した。この作品の冒頭は「或秋の午後、僕は東京から遊びに来た大学生の K 君と一しょに蜃気楼を見に出かけて行った。鵠沼の海岸に蜃気楼の見えることは誰でももう知っているであらう。……」ではじまる。

当時、芥川龍之介は、小田急線鵠沼海岸駅から少し離れたところにあった旅館「東屋（あずまや）」の離れ（北側、貸別荘イの四号）に、妻（文）、三男（也寸志：2-3 歳）の 3 人で住んでいた。蜃気楼が話題になり、訪れた大学生と、近所に住んでいた友人で画家の小穴隆一氏とともに蜃気楼を見に出かけたようだ。その舞台裏については、会誌『鵠沼』（注 4）に掲載されている。

4. 蜃気楼発生メカニズム

蜃気楼(mirage: ミラージュ)とは、「密度の異なる大気の中で光が屈折し、地上や水上の物体が浮き上がったり、逆さまに見えたりする現象」である。実際に見えている風景が上下に変形するものであり、風景が全く別のところに投影されるものではない。蜃気楼は、上位蜃気楼、下位蜃気楼、横（側位）蜃気楼に分類される。下図は上位蜃気楼及び下位蜃気楼の発生の仕組みである。

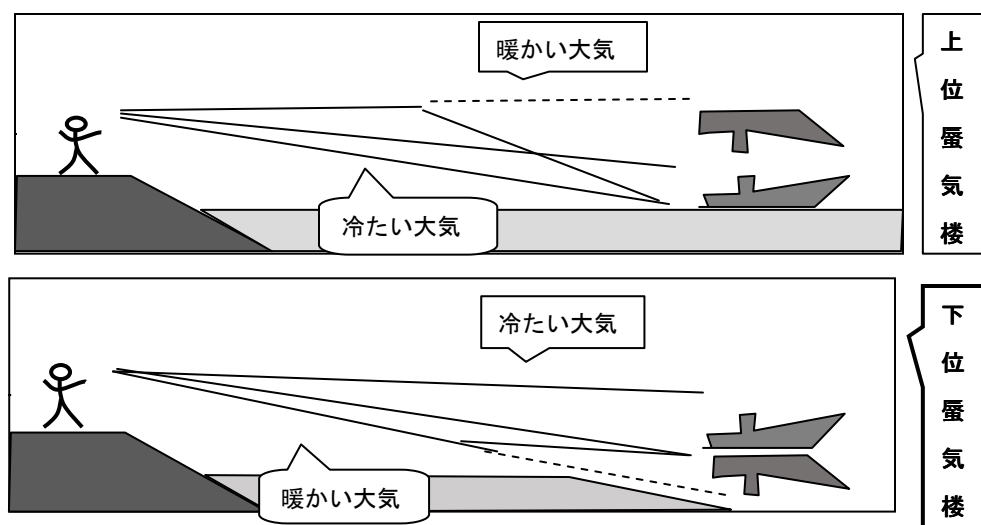


図 1. 上位、下位蜃気楼の発生の仕組み

「上位蜃気楼」は上層が暖かく、下層が冷たい大気の状態（上暖下冷）で発生する。実際の風景の上側に伸び、反転した反転像（虚像）が見えるもの。大気中で温度差がないと、光は直進するが、冷たい大気と、暖かい大気が重なり合い、光の屈折がおきて蜃気楼が発生する。上位蜃気楼として、富山湾魚津市（富山県）の蜃気楼（注5）が有名である。春から初夏の暖かくなった大気の下、立山連峰の雪解けの冷たい水が富山湾に注ぎ、上暖下冷の空気層（密度に差が生じる）ができ、対岸の景色や、沖の船が浮き上がったたり、逆さまになったりして見えるという。この魚津市のほか、小樽（注6）、オホーツク海沿岸周辺、琵琶湖周辺などでの発生が知られている。

下位蜃気楼は上層が冷たく、下層が暖かい大気の状態（上冷下暖）で発生する。実際の風景の下側に反転像が見える。下位蜃気楼は目にする機会の多い蜃気楼である。夏に見られるアスファルト道路や、砂漠、砂地など熱い地面に接した空気が熱せられ発生する「逃げ水」「かげろう」「砂漠の蜃気楼」などがある。また、「浮島」現象は冬に多く見られることから、冬型（冬の）蜃気楼とも呼ばれる。冬場、海水温が高く、そこに冷たい大気（放射冷却など）が流れ込み、上冷下暖となって蜃気楼が発生する。鵜沼海岸の海で見られる蜃気楼は、この下位蜃気楼に相当する。なお、横（側位）蜃気楼は、大気の密度の違いが、水平方向に作られるもので、観測例はないが、九州、八代海に現れる「不知火（しらぬい）」がこれに相当するといわれている。

5. 鵜沼海岸で見られる蜃気楼

蜃気楼撮影のための行動範囲としては、鵜沼海岸周辺の片瀬東浜、江の島、江の島への弁天橋、鵜沼海岸、辻堂海岸、辻堂海浜公園前から、汐見台に至る海岸が中心である。撮影目的によっては、茅ヶ崎の柳島や、鎌倉、材木座海岸などへもでかけた。蜃気楼状態の島、半島、船、波、人、建物、海岸など、水平線上のものすべてのものを対象とし、さらに、できる限りサーファーなど海で活動している人々を入れ込むようにして撮影している。

5. 1 島の蜃気楼

1) 烏帽子岩

烏帽子のような形をしているので、「烏帽子岩」と呼ばれるが、正式名は、姥島（うばしま）である。茅ヶ崎の沖合約1.2Kmにあり、烏帽子岩の高さは約20m、複数の岩礁群からなり、東西に約600m、南北約400mに分布する。烏帽子岩の先端は過去には尖っていたが、戦後、米軍第一騎兵師団の戦車砲実弾演習の標

的となり、現在の形になったという。

烏帽子岩の蜃気楼を見るのに、鵜沼海岸は最高の場所と思う。冬の季節、烏帽子岩をしっかりと見れば、かなりの確率で浮島（蜃気楼）となる。写真3は引地川の河口で撮影したもので、河口のコンクリート岸壁に当たる波、サーファー、箱根の山々がはっきり見え、烏帽子岩、船などが蜃気楼となっている。別の日に蜃気楼状態の烏帽子岩（写真4）を大きく撮影したもので、烏帽子岩は浮き、反転像（虚像）となっている、周辺の岩礁群の上にはカラフルな服装をした釣り人と思われる像を見ることができる。釣り人も島と一緒に浮き、蜃気楼となっている。波が荒く、白波が立つ時、岩礁群に打ち寄せる白波も蜃気楼となり、正像、反転像ともにダイナミックに移動する。双眼鏡や、フィールドスコープ等を通して観察すると楽しい。

蜃気楼の部分は基本的に温度の異なった大気が混じり合うところであるので、屈折率も入り乱れる。そのため、像はチラチラと揺らぐ。蜃気楼が発生していない烏帽子岩や岩礁群を撮影したことがあるが、烏帽子岩も、岩礁群の上の釣り人も、極めてシャープに映ったのには驚いた。蜃気楼状態の場合は、残念ながらいつもピンボケ写真となる。パソコンの中の「蜃気楼の写真」はピンボケ写真のオンパレードである。

2) 江の島

江の島の裏に点在する稚児が淵などの岩礁群は、辻堂方向からみると蜃気楼となり浮く。しかし、江の島自身は浮島としては観察し難い。これは観察するところからの距離が近すぎるからである。この写真（写真5）は逗子に近い、鎌倉、材木座海岸から撮影したものである。手前には江戸時代に港として作られたという和賀江島が見える。背景には、箱根の山々が見え、この写真にはないが、真っ白な雪をかぶった富士山も右手に見える。江の島を良く観察すると、水平線上に近い場所が蜃気楼となっている。白波、かながわ女性センター、ヨットクラブ、ヨットハーバー、旅館などの建物などが、ぼんやりとなって浮き、反転像を形成している。正像（実像）の方をしっかりと見ると、上方にゆくに従い、ボンヤリしている像のピントが段々と合ってくる。展望灯台などは、はっきりと映っているが、蜃気楼の部分はピンボケである。

3) 伊豆大島、利島など

視界が良い時、鵜沼海岸から伊豆大島が見える。その大島の蜃気楼はわかりにくい。それは大島が蜃気楼の対象物としては、やはり大きすぎるために十分に

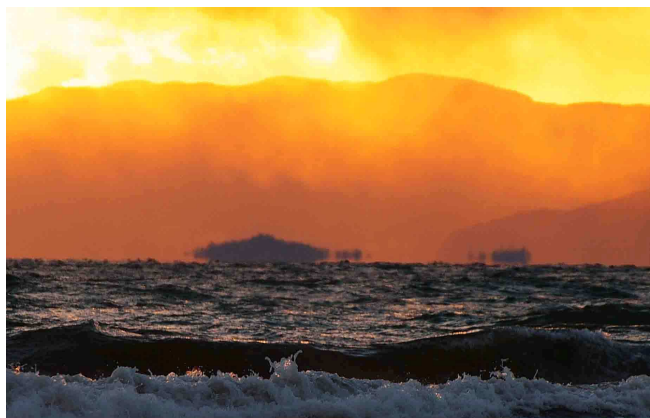


写真1 伊豆半島方向に浮島



写真2 漁船が不思議



写真3 烏帽子岩と箱根の山々

浮かないからである。しかし、島の両サイドの水平線のところを観察すると、島は浮かび、わずかに反転像（虚像）になっていることがわかる。大島の次に鵜沼海岸に近い利島（としま）は大島に比べ極めて小さいが、良く浮かぶ（写真6）。小さく浮かんでいるのが利島であり、左の一部の島影は伊豆大島である。水平線上の形から大島も浮かんでいることがわかる。これまで、利島については何度も撮影したが、新島、式根島などの伊豆七島については、撮影することができていない。気象条件さえ整えば、撮影できるものとばかり思っていた。しかし、鵜沼郷土資料展示室で、湘南の眺望写真展が開催されていた際、鵜沼在住の写真家、市川勝典氏によると、地球が丸いため鵜沼海岸の道路の高さからは、視界が良くても、この2島しか見えないとのことである。なお、高さのある江の島の展望灯台からは、新島、式根島が見え、利島も海岸からより大きく見えるとのことであった。

5. 2 半島の蜃気楼

1) 三浦半島、房総半島

片瀬東浜の階段から、冬場、三浦半島が良く浮き、蜃気楼になるのを見ることができる。日の出の時刻、腰越漁港から、次々と漁船が出てゆく。その進行方向に浮かんだ三浦半島（写真7）がある。鵜沼海岸からは、江の島の影となり、三浦半島は見ることはできないが、辻堂方向に離れると、浮いた三浦半島をみることができる。

茅ヶ崎の熱血カメラマン（注7）と呼ばれる、高橋昭和さんは、現在、4,700日に近く連続で、毎日休まず撮影し、世界記録を更新中であるという。高橋昭和さんは烏帽子岩をテーマに、写真集を出版したこともあり、また、ホームページには、「浮島（蜃気楼）」として、三浦、房総半島が浮いた写真なども紹介している。以前のホームページには、房総半島の先端の館山に近い洲崎（すのさき）の浮島（蜃気楼）写真を掲載していた。洲崎は、半島のように出た地形をしているが、高橋さんは、洲崎を浮島のような映像として紹介した。

撮影場所は異なるが、この写真（写真8）も洲崎と推定している。なお、手前の漁船は第五堀川丸、鵜沼の堀川網、葉山一郎さん所有の船である。

2) 伊豆半島など

伊豆半島も浮島現象を示す。写真9のように、半島の先端部は浮き、反転像となる。蜃気楼を撮影するきっかけとなった、伊豆半島方向に見えた島は、地図上から、伊東に近い初島とは方向がずれている。浮島として見えた島々は、真鶴

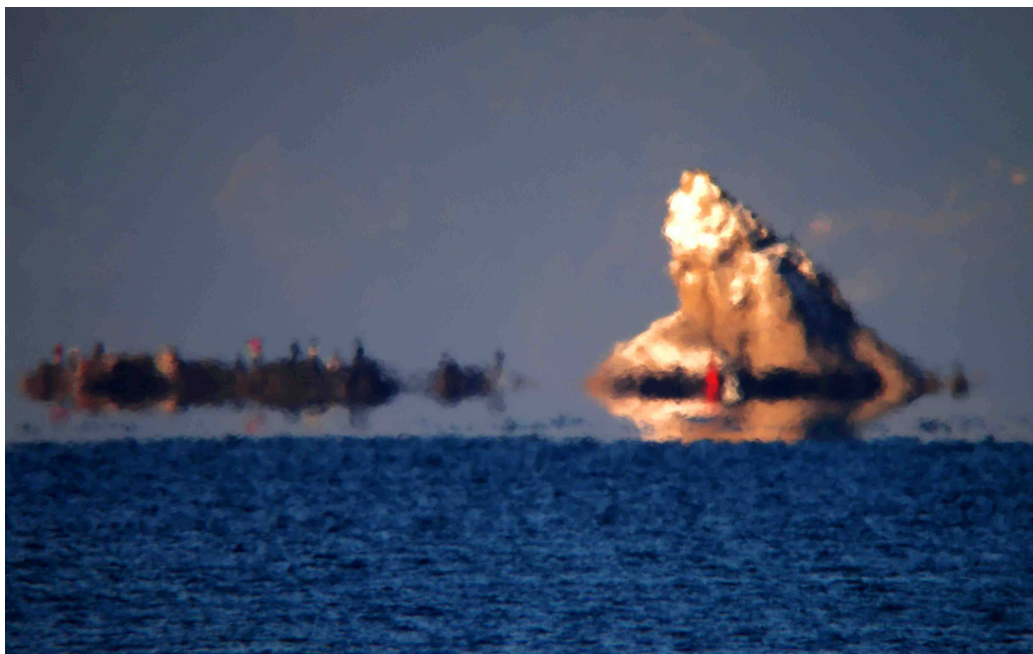


写真4 烏帽子岩の蟹気楼

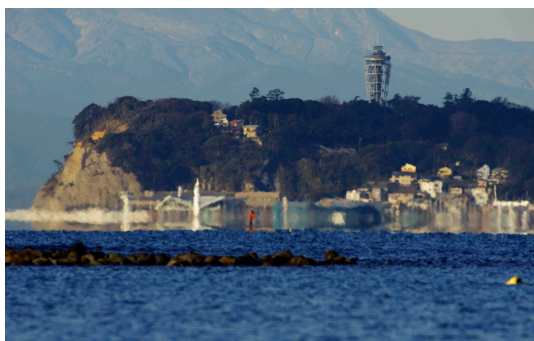


写真5 江の島の蟹気楼

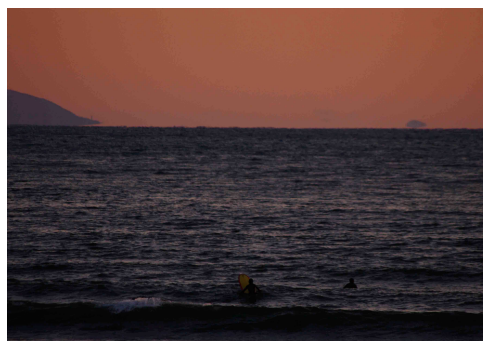


写真6 大島と利島

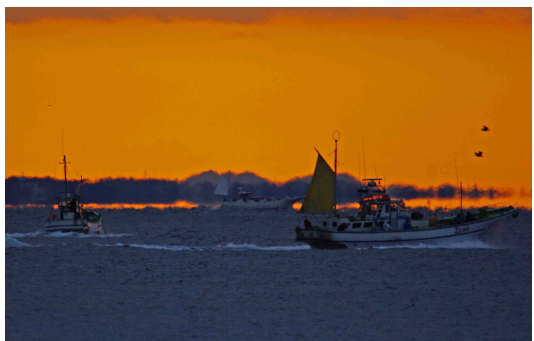


写真7 三浦半島の蟹気楼



写真8 房総半島の洲崎

半島などの褶曲した地形が、洲崎と同様に島のように見えたのではないかと推定している。

5. 3 船の蜃気楼

船の蜃気楼を私は勝手に3つに分類している。それは、1) ワニ型、2) ノビ型、3) アリ型である。1) 「ワニ型」(写真10)は最もよく目にする典型的な船の蜃気楼。船の船首が浮かび、反転像(虚像)が下側に現れる。そのため、ワニが口を開けたような独特の形を示すところから命名した。2) 「ノビ型」(写真11)は船の側面が蜃気楼状態になり、側面が伸びたようになったもの。船が観察地点に比較的近く、船が大きく映る場合に発生する。まるで、幽霊船のような感じに見える。3) 「アリ型」(写真12)は蜃気楼になった船が極めて遠く、まるで、昆虫のアリが歩いているような形をしたもの。しばしば、伊豆大島周辺に現れるが、現れる頻度は少ない。船の写真としては、近くの漁船は正常な形であるが、遠くの漁船はワニ型の蜃気楼となる場合(写真2)があり、この対比が面白い。また、「ノビ型」「ワニ型」の組み合わせで、蜃気楼となる場合もある。

なお、鵠沼海岸でよく漁をしている漁船として、第5堀川丸(堀川網)、湘南丸(浜野水産)、新生丸などがあり、望遠レンズで船の名前が確認できる。遠くに見える船の多くも漁船が多いが、釣り船、客船、サルベージ船のようなものなど、いろいろな種類があり、その蜃気楼も面白い。そのなかで蜃気楼になったタンカー(写真13)を撮影したことがある。日没時、鵠沼海岸の平和の像に近いところの遊歩道から撮影した。沈む太陽の光がタンカーを輝かせていた。タンカーが蜃気楼の形に見えたのは、ほんのわずかな時間のみであった。

5. 4 蜃気楼を背景にした写真

烏帽子岩などの蜃気楼だけの写真も良いが、蜃気楼と他とのバランスの中での写真も捨て難い。鵠沼海岸の海で活動しているものとして、サーファー、スタンドアップパドルサーフィン、ウインドサーフィン、漁船、釣り船、カヌー(タンデム含む)、アウトリガーカヌーなどが目に入る。ここでは、サーファーと蜃気楼となった烏帽子岩、および、タンデム型カヌー及びアウトリガーカヌーと烏帽子岩の組み合わせの写真を紹介したい。

1) サーファーと烏帽子岩

蜃気楼となった烏帽子岩を背景に、手前にサーファーを配置した写真を撮影しようと夢中になった時がある。サーファーにとって良い、大きい波は北からの風が良い。煙筒の煙の方向を確認しながら撮影に出かけた。また、北風は、大き

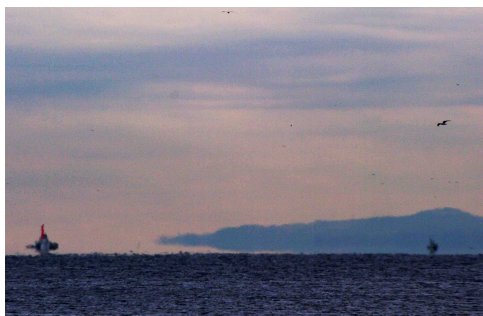


写真9 伊豆半島の蟹気楼



写真10 船（ワニ型）の蟹気楼



写真11 船（ノビ型）の蟹気楼



写真12 船（アリ型）の蟹気楼

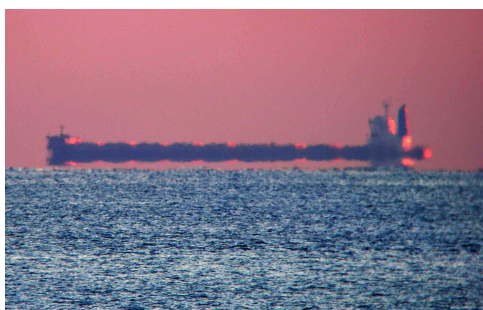


写真13 タンカーの蟹気楼

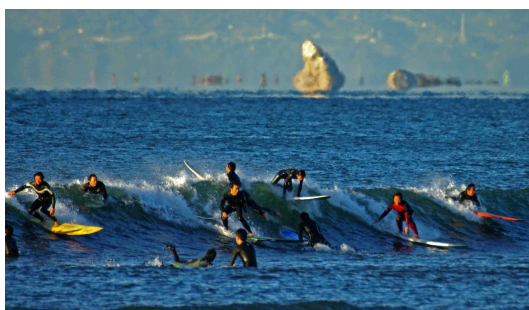


写真14 サーファーと烏帽子岩

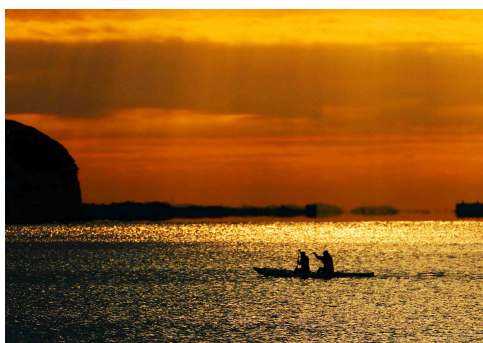


写真15 タンデムカヌーと三浦半島



写真16 アウトリガーカヌーと烏帽子岩

な波を作るだけでなく、カメラ機材に海の潮風からの被害を与えないのでカメラにとっても良く、一石二鳥である。引地川河口で、サーファーにピントを合わせ、背景に蜃気楼となり浮いた烏帽子岩がある。そんな写真を撮り続けた。サーファーは列をなして、大きな良い波が来るのを待つ、そして、一斉に波にのる。なかなか気に入った写真を撮れなかった。サーファーにピントを合わせると、蜃気楼は大きくぼけてしまう。強い蜃気楼と、波が大きくて、すばらしいサーファーが見られる良い条件が一致するチャンスは極めて少ない。波が比較的大きな、好条件で撮影した一枚（写真 14）である。

2) カヌーと蜃気楼

三浦半島が蜃気楼となり、明け方、周りが赤く輝く時、2人乗り（タンデム）のカヌーが現れた。カメラをセットし、写真（写真 15）を撮影するも、瞬間に江の島の島影に消えていった。海面が黄金色に輝き、なにか神々しい感じのひと時であった。

アウトリガーカヌーとは、南太平洋などで用いられるカヌーの一種である。安定性を増すために、カヌー本体の片脇にアウトリガーと呼ばれる浮子（ウキ）が張り出した形状をしている。6人乗りで、しばしば、烏帽子岩付近から、江の島の方向に現れる。思っているよりも早く走行するので、早く見つけ、しっかりピントを合わせないと撮影できない。烏帽子岩の近くを走行するアウトリガーカヌー（写真 16）を撮影したものである。湘南アウトリガーカヌークラブ、茅ヶ崎アウトリガーカヌークラブがあるが、カヌーは前者の所属（江の島の西に基地がある）と思われ、江の島の島影に消えていった。

6. 蜃気楼を見つける方法

鵠沼海岸の海に上位蜃気楼が現れる季節は、11月頃から3月頃の間であると思う。しかし、3月下旬にも良好な蜃気楼を見たことがあった。蜃気楼の撮影には、朝、夕方出かける。これは写真としての光線状態が良いためであるが、蜃気楼の発生は昼でも観察は可能と思う。

下位蜃気楼の発生要件は、海上の大気が上寒下暖の温度分布になる必要がある。そのような気象条件が発生に適しており、冬、良く晴れ、放射冷却が起こる、霜が降りるような日が良いと思う。しかしながら、実際には、行ってみないとわからない。視界が良い時に、よく発生するという情報（注5）もある。晴れ、曇りいずれも見えるが、雨や、雨の翌日や、強風時（多少の風は問題ない）など、蜃気楼の発生は困難である。鵠沼海岸からは、烏帽子岩を対象とするのがわかりや

すい。これまで紹介してきたように、水平線上のものすべてが対象とすることができる。その時、観察する場所（水面からの高低）は重要である。海岸道路から見て蜃気楼が見えないから、蜃気楼が発生していないと判断するのは早計である。海浜に降り、必ず海水面の近くまで、目の高さ変えて調べる。目の高さで、蜃気楼の形も変わる。蜃気楼となるのは、気象条件によるが、観察地点から対象物までの距離として2km以上が必要でないかと思う。近すぎると浮かない。蜃気楼は、遠くて小さいので、双眼鏡、フィールドスコープなどがあると良い。

7. おわりに

私が撮影している鵜沼海岸の「蜃気楼」は、下位蜃気楼、冬の蜃気楼である。11月から3月頃までの休日、蜃気楼を撮影している。撮影機材はデジタル一眼レフカメラと超望遠レンズの組み合わせ、デジスコシステム（フィールドスコープとコンパクトデジタルカメラの組み合わせ）などに、しっかりした三脚、雲台を用いている。残念ながら、蜃気楼は、遠くて、小さく、その像は激しく揺らぎ、ボケる。蜃気楼を見たい場合には、冬場、鵜沼海岸で「烏帽子岩など」の蜃気楼を毎日のような確率で見ることができる。しかし、十分に浮いて、正置像、逆転像とも、クリアーにコントラストをもった、素晴らしい「蜃気楼」をみることができるのは、それほど多くない。蜃気楼の写真撮影は、私にとっての趣味である。あくまでも自分の気に入る「蜃気楼」の写真をこれからも撮影してゆきたい。

8. 参考資料（注）

- 1) 空をみる、蜃気楼 p.148—151（ちくまプリマーブックス 142、文、平沼洋司、写真、武田康男、筑摩書房）
- 2) 鵜沼を巡る千一話：第 0267 話、蜃気楼ブーム（渡部 瞭）
(<http://homepage3.nifty.com/kurobe56/ks/>)
- 3) 芥川龍之介作：蜃気楼（続海のほとり）
- 4) 芥川龍之介「蜃気楼」とその舞台（鵜沼を語る会、『鵜沼』83号、p 2-7）
- 5) 蜃気楼/魚津市ホームページ (www.city.uzo.toyama.jp)
- 6) 小樽市、小樽の蜃気楼（高島おばけ） (www.city.otaru.lg.jp)
- 7) 高橋昭和/茅ヶ崎熱血情報 (<http://members.jcom.home.ne.jp>)

アクセスはいずれも(2014/8/20)

(みやざき ともゆき)

鵜沼と小泉八雲

有田 裕一（会員）

藤沢市内の観光スポットとして江の島島内にサミュエルコッキング園が今、脚光を浴びている。コッキングは貿易商として明治 13(1880)年に江の島に来て事業をおこし、片瀬ばかりでなく、鵜沼にも多くの土地を所有していた。

この少し前、明治 10(1877)年、エドワード・モース(1838～1925)が来日、東大が創設した江の島の臨海実験所で7月17日～8月29日、海洋生物の調査を行った。モースは横浜―新橋間の汽車の窓から大森貝塚を発見したのである。モースの江の島での庶民の生活を驚きと共につづったのが『日本 その日 その日』である。



小泉八雲

それから 10 年余後に、今回とりあげるラフカディオ・ハーン(小泉八雲 1850～1904)が来日している。明治 23(1890)年 4 月 4 日、アメリカの「ハーバー・マガジン」の探訪記者として来日、横浜滞在 5 ヶ月の間に、鎌倉、江の島近辺を始め日本の各所を訪れた。モースが庶民の使うものを通して日本文化を紹介しようとしたのに対し、ハーンは庶民の心を見詰めた。日本文化の解明は生易しいものではなく、ハーンは長期滞在を余儀なくされ、その間に小泉節子(セツ)と出会い、結婚し、帰化すること

になる。彼はイギリス人の父、ギリシヤ人の母を持つギリシヤ生まれのイギリス人で、来日した時は 39 才であった。ハーンは松江の尋常中学校、熊本の第五高等学校の英語教師を経て明治 29(1896)年、東京帝大の英文学講師につき日本に帰化し「小泉八雲」と名乗った。その後明治 37(1904)年、早稲田大学の講師をつとめながら、西大久保の自宅で亡くなっている。

この間、日本での生活は 14 年間。彼は紀行文、創作活動を精力的に行い、『耳なし芳一』など怪談でおなじみになっている。代表作に『知られざる日本の面影』があり、そのなかの「江の島巡礼」に江の島、藤沢の記述がある。

＊

彼は外国人居留地から人力車に乗り、日本人アキラの案内で鎌倉、円覚寺、建長寺、円応寺、大仏、長谷観音、そして人力車のまま江の島に。そこでは産物の

貝細工に感銘を受け、江の島を「青貝の都」と表現した。

江の島から藤沢へ向かう途中の道で、道端の六体の石像にひかれ、道路の神様庚申塔に直面する。これと似たものが遊行通りの庚申堂にあると聞くと、そこへ向かう。庚申堂の祠は荒廃していて、風雨に打たれるにまかせてある状態だった。ハーンはこれを丹念に観察し、掛け軸もあると聞くと、これも見せてもらう。この時近くの藤沢駅の機関車の汽笛が聞こえ、急いで庚申堂を立ち去る。



遊行通りにある現在の庚申堂

この時ハーンは庚申の神を哀れみ、鉄道が神々の道路であったものを征服し、往昔の神々は西洋文明が撒き散らす残灰で死に瀕しつつある、と云い残している。この時の汽笛は明治23年、湘南の地に鉄道が開通してまだ3年目のものであった。

＊

明治 31(1898)年夏、小泉八雲 48 才の時、家族同伴で相州鵠沼へ海水浴に来ている。この時、長男の一雄は6才、泊まった宿屋は吾妻屋（東屋）である。東屋も開設したばかりであったろう。家族がその前年に焼津へ行った時、助手の乙吉さんが居たので一雄は海へ入ったが、鵠沼では乙吉さんが居ないため、海を恐れてばかりいて父(八雲)を失望させた。八雲にとっては、旅館は東京、横浜辺りからの客が多く、騒々しくてあまり気に入らなかったようであるが、東京から女中や書生を交代で呼び寄せたりして、約3週間東屋ですごした。この間、水泳の他、貝を拾ったりカニを捕ったり、砂山を築いたりして愉快地遊び暮らしたのである。

八雲を最も閉口させたのは、子供ではなく「およね」という女中だった。鵠沼の海の話が出る度に八雲が思い出すのはこの女中のことで、家族で鵠沼の海へ行った時「およね」は泳ぎをわきまえないのに、一人でどんどん沖へ行ってしまう。八雲は驚いておさえるのであるが、逆に八雲を引き摺りながら深い方へ行ってしまう。この女中と心中してしまいそうになり、とても恐ろしかったと云うエピソードを残している。鵠沼で長男達は同宿した田村さんという家族に可愛がられ、毎日のように種々の貝細工の玩具を買ってもらっていた。

東屋の芝生の庭の向こうに、低い生垣があり、これを隔てて離れの屋敷がよく

見えたそうで、そこには常に俳優の団がいた。この団とは沢村訥子丈とその子ら、沢村宗之助、長十郎、伝次郎の兄弟であったそうである。

筆者の記憶では、この離れであろうと思われる位置は東屋の建物の中で、最も海と肥上げ道に近い所で、終戦後のことであるが清元延寿大夫(宮川)さんが住み、その後、国立劇場の海の家としての建物があったのであるが、明治時代の離れ屋敷はこの前身であろうか。

八雲が来鵠した頃、その芝庭の向こうにブランコがあった。先の子供連中も、良くここへ来てブランコで遊んだ。一雄はある日、このブランコに乗り、女中に背中を押してもらっていた所、八雲が来て女中に代わりだんだんと強く押し、前後に高く振りを大きくしていった。最初は怖がったので「もうやめて!」と叫んだのであるが、だんだん面白くなり、その後は八雲や他の人に強く押すことを要求、一雄はますますブランコが好きになった。そして八雲は帰宅後、自宅にブランコを造ることになった。

八雲は鵠沼宿泊中に、毎夕晩酌をやった。徳利と盃で大抵1本どまりであった。これをやるのも焼津か鵠沼の避暑地のみであったと云う。八雲の宿泊の目的は避暑よりも水泳であったという。残念ながら鵠沼での散歩のコースはわかっていない。ただ在宿の時も、外出の時も、いつも和服であったと云う。

この頃、鵠沼海岸は開発が始まったばかりで明治19(1886)年、鵠沼海水浴場が開設されてから、まだ10年きりしか経過していない頃の話である。

鵠沼に八雲一家が避暑に来て、その庭にあったブランコを子息が気に入り、東京の自宅にもこれを造ってしまった話など、当時の日本の文化を世界に紹介した八雲とは、別の顔を持った家庭的な人柄をうかがわせる。

ちなみに、八雲の子息、一雄が気に入ってしまった東屋のブランコは、庭のどの辺にあったのか? 幸い筆者と、西会員が調査をした東屋の震災前の建物と庭の概略図(会誌75号)があるので、次ページに掲載する。

この図は同地に幼少の頃から住まわれていた東屋の女将、長谷川タカの姪御さん、福田光代氏の記憶により、再現していただいたものである。これによれば人気のあったブランコの位置と「離れ」の位置が推定できる。

(ありた ひろかず)

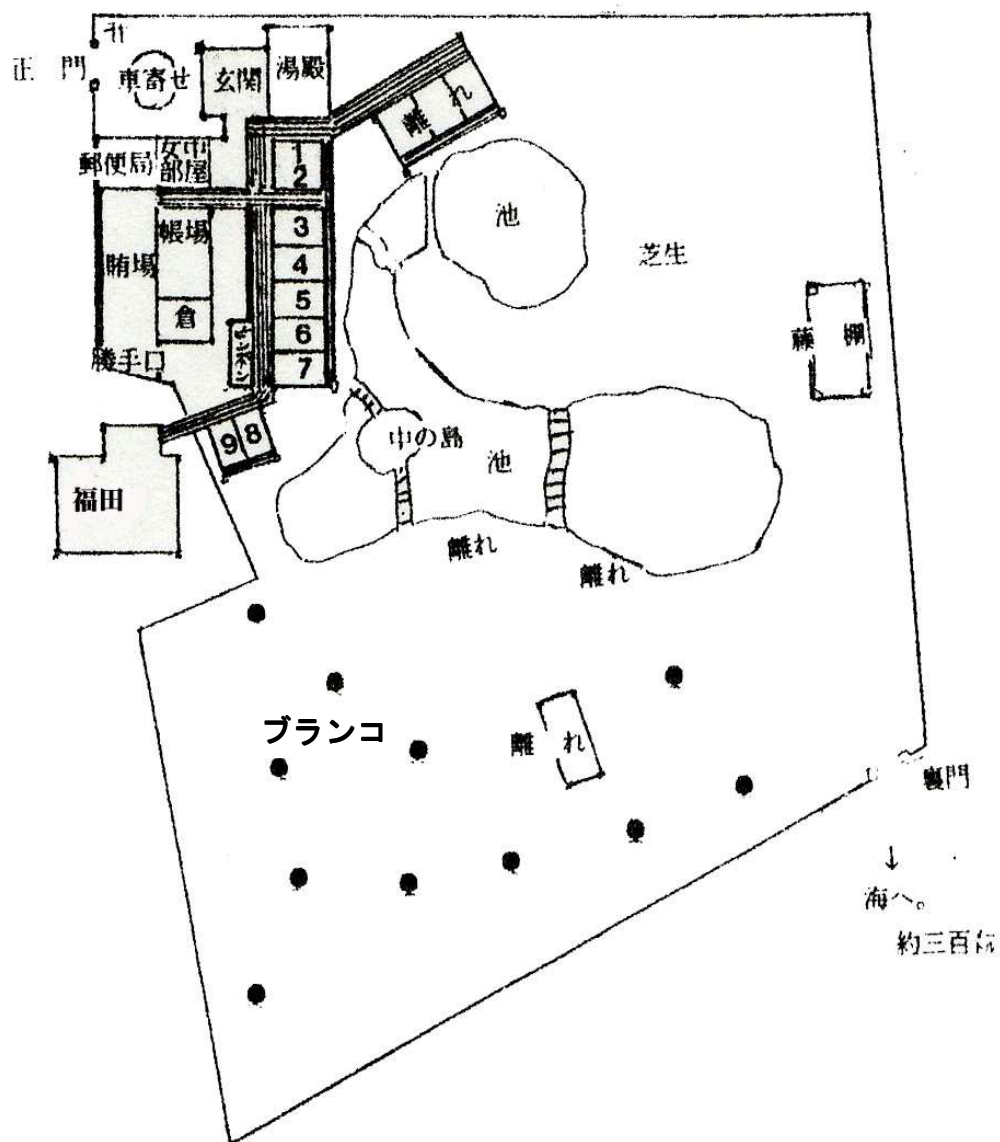
参考文献:『藤沢の文学』名著出版 北澤瑞史

『思い出の記 父「八雲」を憶う』恒文社 小泉節子 小泉一雄

東屋旅館概略図

(西忠保氏、有田裕一氏作成)

関東大震災前



会誌『鶴沼』第75号「東屋旅館の歴史をたずねて」より

『宝治合戦とその後の三浦氏』

小池 清志（会員）

三浦氏は源頼朝の幕府創設時、北条氏と並び立つ幕府の両輪であった。北条氏と三浦氏との違いは、北条氏では時政の下に一つにまとまっていたのに対し、三浦氏は惣領（一族の嫡流）が義澄であったが、岡崎義実、和田義盛、佐原義連らは惣領家からは独立的であった。後者三人は惣領家を通さず直接頼朝に仕える御家人であった。そのため三浦一族とも呼ばれ、必ずしも一枚岩ではなかった。それが 1213 年（建保元）の和田合戦の時、端的に表れた。義澄の子義村は和田義盛に味方せず、北条義時についたのである。その後、義村は北条義時に協力し幕府 No. 2 の座を確保したのであったが、義村の子泰村の代に北条氏・安達氏と衝突し、嫡流は滅んだ。それが宝治合戦である。

Q 1. 宝治合戦の原因となった事件は何か？

寛元 4 年（1246）、家督と執権職が経時から弟の時頼に譲られた。

（資料 2. 北条氏系図参照）

これに対し 4 代将軍九条頼経（藤原氏五摂家の一つ）とその側近の武士北条光時・三浦光村らのグループが北条嫡流家の政権独占に不満を持ち、謀反の謀議をしようとした。そのため頼経は京都へ送還された。それを寛元の政変という。

Q 2. 北条時頼の母はだれか？

「徒然草」に出てくる松下禅尼で、彼女の実家は安達氏である。安達氏の初代は藤九郎盛長といい、頼朝が伊豆に流罪中からの側近であった。

5 代執権時頼は幕閣での主導権確立のため、六波羅探題の北条重時を連署にしようとしたが、三浦泰村の反対にあい実現しなかった。これを聞いた安達氏は時頼の外戚の立場から打倒三浦氏の急先鋒になった。

（資料 3. 安達氏・北条氏の関係図参照）

Q 3. 宝治合戦の経過と勝敗の帰趨は？

1247 年（宝治元） 5 月 13 日、将軍頼朝の妻檜皮姫（ひわだひめ時頼の妹）が亡くなった（18 歳）ので、時頼は三浦泰村邸に入り、喪に服す。

5 月 27 日夜、泰村邸で鎧・兜など武具の触れ合う音がするので、時頼は脱け出して自邸に帰る。

6 月 2 日、近国の御家人等群参し、時頼邸を護る。時に佐原盛連の子息たち時頼邸にこもる。

（泰時の正室矢部禅尼が佐原盛連に嫁して、光盛・盛時・時連を生んだ）

6 月 5 日、時頼は家臣の平盛綱を泰村邸に和平の使者として送る。

和議をおそれた安達一族は景盛の命令一下、三浦邸（今の国大付属小学校）に攻めかけた。三浦氏は和議になったと思ひ隙を衝かれた。結局、北条時頼も泰村討伐軍を差し向けた。

○毛利季光（^{すえみつ}現在地厚木市毛利）は当初北条側につこうとしたが、妻（三浦泰村の妹）の反対にあい、泰村側に馳せ参じた。

（季光は戦国時代の毛利氏の祖先）

○戦の経過

西御門の三浦邸を焼かれた三浦勢は頼朝の墓所法華堂（現在頼朝の墓が有る所）に入った。やがて二階堂永福寺に籠っていた泰村の弟光村の手勢も法華堂に集結、最後の一戦を行い、源頼朝画像の前でしばし往時を語りあい、自刃して果てた。ここに三浦氏の嫡流は滅んだ。

Q 4. 三浦一族の中で、北条時頼に味方した佐原三兄弟と時頼との血縁関係は？

3 代執権北条泰時の時代には、三浦義村の娘、矢部禅尼が泰時の妻であったが、両者は離婚し、矢部禅尼は佐原盛連と再婚した。その子たちが光盛・盛時・時連である。（資料 4. 矢部禅尼と北条氏・佐原氏関係図参照）

Q 5. 宝治合戦の結果、海上の覇権は何氏から何氏へ移行したか？

三浦氏は関東一の水軍を持っていた。だが水軍の本場は瀬戸内海や紀伊半島であった。壇ノ浦の合戦で義経が勝てたのも、熊野の別当堪増の加担が大きい。ところが熊野水軍は承久の乱で官軍について敗れたため、紀伊守護として三浦氏が支配した。三浦氏の領地で注目すべきは、高麗や南宋との交易にあたる筑前宗像（むなかた）神社領の預所職（あずかりどころしき）や肥前神崎荘の地頭職を持っていた。（資料 5. 三浦一族の守護・地頭所在地参照）

北条氏も中国からの貨幣の輸入や禅宗文化の摂取のため、海上の覇権確立に迫られていた。それが安達氏と三浦氏の対立上で安達氏に組みして三浦氏を滅ぼ

す要因になったと考える。

Q 6. 元寇を扱った絵巻物「蒙古襲来絵詞（えことば）」に出て来る三浦氏は誰？

蒙古襲来絵詞は、恩賞に与れなかった肥後国の御家人、竹崎季長（すえなが）が自分の奮闘を絵巻物に描かせ、恩沢奉行の安達泰盛に訴えた結果恩賞を獲得したのであるが、その絵の一場面「あしなのはんぐわん」が登場しているのは、芦名泰盛のことと思われる。

（資料 6. 「蒙古襲来絵詞（えことば）」登場の芦名判官泰盛参照）

Q 7. 鎌倉幕府滅亡時に活躍した三浦氏はだれ？

「太平記」巻第十に、分倍河原の合戦（多摩川縁）で、相模国の松田・河村・土肥・土屋・本間・渋谷氏を率いて、新田義貞に加勢して手柄をたてた三浦大多和平六左衛門義勝が登場する。

Q 8. 後醍醐天皇の親政時代に起きた中先代の乱で、三浦時継・高継親子のとった行動は？

1335 年（建武 2）の中先代の乱では、父の時継が北条時行方につき、息子の高継は足利尊氏方についた（資料 1 「三浦一族略系図」⑨⑩参照）。高継は尊氏によって、宝治合戦で失った「三浦大介（おおすけ）」の称号を与えられて、油壺に三方を海に囲まれた新井城を築城した。

Q 9. 室町時代の鎌倉府から、相模守護に補任（ぶにん）されたのは誰か？

観応の擾乱（じょうらん 1350～52）では、三浦高通（資料 1. 略系図⑫は足利直義（ただよし、尊氏の弟）側の上杉憲顕（のりあき）につく。後に上杉憲顕が関東管領（かんとうかんれい）に就任（1363 年）すると、相模守護に補任（ぶにん）された。

Q 10. 京都の将軍家と鎌倉公方（くぼう）足利家とが合戦になった永享の乱で、三浦氏はどちらについたか？

（資料 7. 将軍家・鎌倉公方家・関東管領^{かんれい}上杉家系図参照）

永享の乱（1438～39）で、三浦時高（資料 1. 略系図⑬）は最初鎌倉公方足利持氏の命令で鎌倉の留守居役になった。ところが、京都将軍家から時高に、幕府側につくよう命ぜられた。そこで時高は三浦に帰り、兵を整えて鎌倉へ攻め込んだため、公方持氏は滅んだ。

Q 11. 鎌倉公方足利成氏（しげうじ）と関東管領（かんれい）上杉氏との合戦（享徳の乱）では、三浦時高はどちらについたか？

（資料 7. 将軍家・鎌倉公方家・関東管領上杉家系図参照）

第5代鎌倉公方成氏（しげうじ）が関東管領上杉憲忠（のりただ）を殺したことから、上杉氏は挙兵し、幕府に援軍を要請した。幕府側は駿河守護今川範忠（のりただ）に足利成氏を討伐させた。成氏は鎌倉をすて、下総（しもうさ）古河（今の茨城県古河市）に拠点を移した。この享徳（きょうとく）の乱（1454～55）で、三浦時高は終始上杉氏の家臣として動いた。

Q 1 2. 三浦義同（よしあつ）道寸と相模の覇権をかけて争ったライバルは誰？

義同は系図上時高の子となっているが、時高の実子ではない。最近の研究では、上杉高救（たかひら）——義同が親子して時高の養子になったという説もある。ところが、時高に実子が生れたため廃嫡され、新井城を脱出して母の実家小田原へ逃れたが、1494年（明応4）新井城に夜襲をかけ、養父時高を自害せしめた。

その頃相模国に大変動が起った。それは北条早雲（註）が1495年（明応4）大森定頼の居城小田原城を落としたからである。以来義同と早雲はライバル関係になった。1512年（永正9）には平塚の岡崎城にいた義同は早雲に急襲され、城を支えられず翌日小坪の住吉城に敗走した。同年早雲は三浦氏を三浦半島に封じ込める為、玉縄城を建設した。三浦氏も翌年（1513）反撃に出て藤沢周辺で合戦となり、その時の戦火で清浄光寺（遊行寺）が焼失している。しかし、三浦勢は撃退され逆に住吉城も陥落し、敗走して最後の拠点新井城に籠城せざるを得なかった。それから籠城三年1516年（永正13）とうとう兵糧も尽き新井城は陥落した。義同は「うつものも 討たれる者も かわらけよ くだけて後は もとの土くれ」との辞世を残して自害した。ここに宝治合戦から270年に及ぶ佐原三浦介家の歴史は閉じられたのである。

（資料8. 三浦義同道寸肖像、新井城図参照）

註：北条早雲・・応仁の乱（1467～77）の頃室町幕府の実権を握っていた伊勢貞親の一族で、備中荏原荘（岡山県井原市）の高越山城城主であり、伊勢新九郎盛時と名乗った。彼は9代将軍足利義尚（よしひさ）の申次（もうしつぎ）衆（将軍秘書のような役目）であった。彼の姉が今川義忠と結婚し義親が生れたが、義忠の死後家督相続のお家騒動が起った際、駿河に下向して、甥の義親を大名の座につけた。その功労で興国寺城の主となった。その後伊豆の堀越（ほりごえ）公方を滅ぼし、15世紀末には相模国に進出した。彼が在世中は一度も「北条」を名乗ったことは無かった。2代目氏綱の時から「伊勢」氏を「北条」氏と改称したのである。

Q 1 3. 伊達政宗に滅ぼされた会津の三浦氏は誰？

会津芦名（葦名）氏の祖光盛は矢部禅尼の子で会津・大沼二郡を領したと伝えられる。この領地は頼朝の時代、佐原十郎義連が奥州戦役の勲功として会津に領地を与えられたと云われるので、それに該当するものと思われる。室町時代芦名直盛が今の会津若松に鶴ヶ城の前身黒川城を築城した（1384 年）。芦名氏の全盛時代は戦国時代の永禄年間（1558～70）で芦名盛氏の時代であった。その後、伊達氏が台頭して 1589 年（天正 17）、芦名義広は伊達政宗によって滅ぼされた。ここに鎌倉時代から続いた三浦芦名家は秀吉の天下統一の前年に惜しくも滅亡したのである。

Q 1 4. 徳川家康の側室で三浦氏の血筋を引く人は誰？

新井城が陥落する直前、義同は幼児の弥九郎を密かに安房へ逃がした。彼は成人して正木時綱と名乗った。時綱の息子時忠は子どもの頼忠を小田原の北条氏に人質として差し出した。

頼忠は北条氏康の姪と結婚した。彼女との間に生まれたのが、為春とお万である。お万は北条氏が滅んだ後、徳川家康の目にとまり、側室になり頼宣（紀伊）・頼房（水戸）を産んだ。（資料 1. 三浦一族略系図⑮、資料 9. 正木氏系図参照）

Q 1 5. 江戸時代三浦長門守と名乗り、明治時代男爵の称号を得たのは何藩の家老か？

お万の兄為春は 1598 年（慶長 3）家康に召し出され、3 千石を与えられ正木から「三浦」に復姓するようと言われた。為春は甥の頼宣が紀州藩主となるに及んで、その家老となり、2 万石を領した。その末孫は明治維新に際し、男爵を授けられた。三浦英太郎男爵は 1924 年（大正 13）三浦郡和田の地に和田義盛の顕彰碑を建立した。

Q 1 6. 江戸時代三浦一族の子孫で唯一大名となり、明治時代子爵の称号を得たのは何藩の大名か？

（資料 1. 三浦氏略系図⑯・⑰参照）

遠祖は三浦義村の四男家村に遡る。三浦家重は三河に住み、妻は徳川家の重臣土井利政（としまさ）の娘であった。息子の正次は伯父利勝（利政の嫡男）の養子になり、1608 年（慶長 13）2 代将軍秀忠に謁見し、家光の小姓に取り立てられる。のち三浦姓に復し志摩守を称した。のち島原の乱（1637 年）の功により大名に取り立てられ、1639 年（寛永 16）下野（栃木県）壬生（みぶ）城 1 万 5 千石の城主となる。それから 5 代孫の明次の時、1764 年（明和元）美作（みまさか）・勝山城 2 万 3 千石の城主となった。その子孫は明治維新に

際し、子爵を授けられた。三浦基次子爵は 1921 年（大正 10）三浦市初声に有る「和田朝盛塚」碑を建立した。

Q 1 7. 三浦氏の子孫で「夜明け前」を書いた文学作家は誰か？

鎌倉幕府滅亡時、分倍河原の合戦で活躍した大多和義勝（Q 7. 参照）は永嶋家の祖先という。永享の乱（1438～39）頃永嶋家から島崎藤村の祖先が分岐したという。永嶋家は戦国時代北条氏に仕えていたが、北条氏が滅んで帰農した。島崎藤村は 1929 年（昭和 4）「夜明け前」の取材で永嶋家を訪れている。

[回 答]

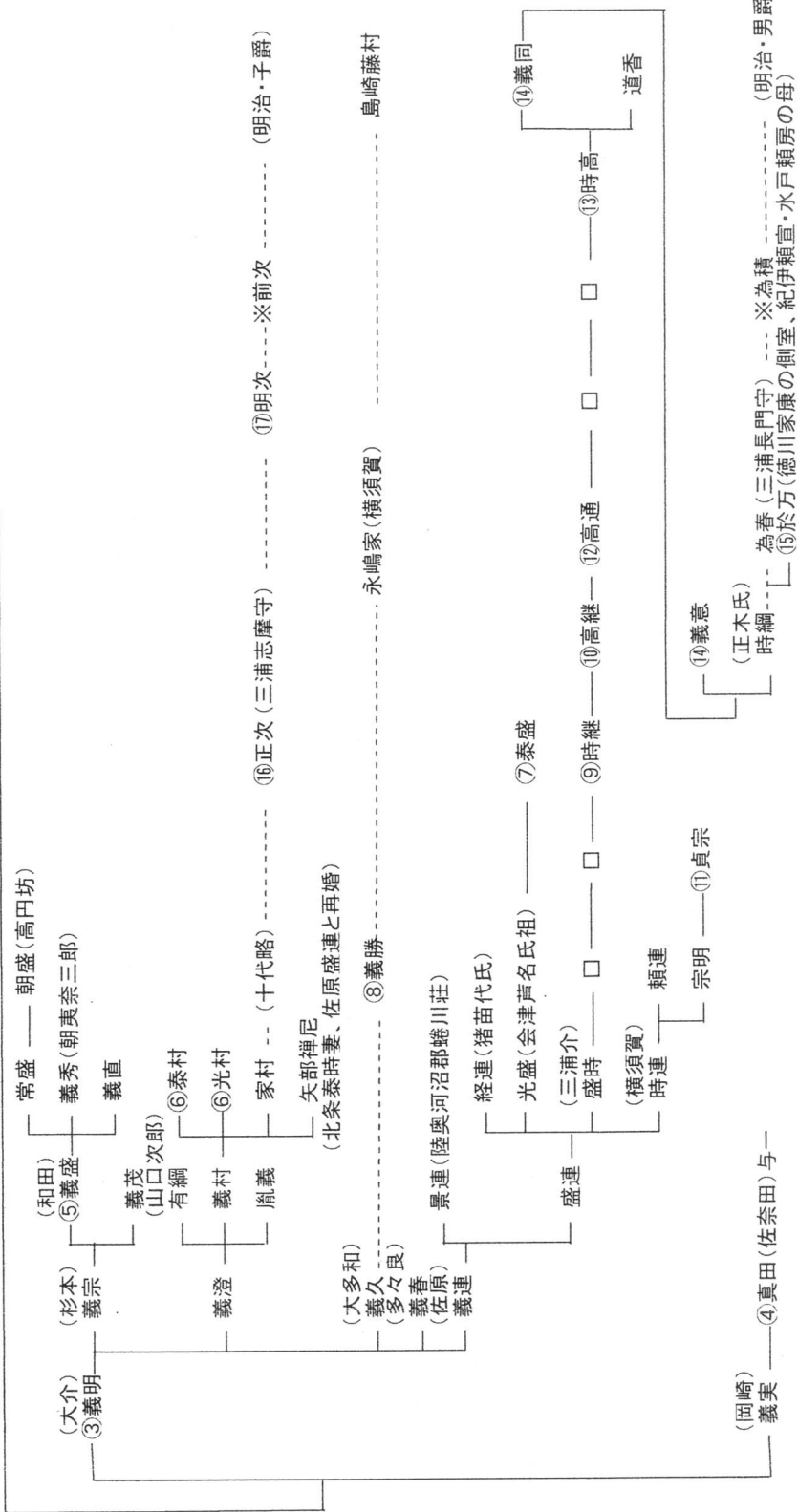
- A 1. 寛元四年の政変
- A 2. 「徒然草」に出てくる松下禅尼（安達氏）
- A 3. 経過はレジュメ参照。勝ち組：北条氏・安達氏。 敗亡：三浦氏（嫡流）
- A 4. 北条時頼は佐原三兄弟の甥にあたる。
- A 5. 三浦氏→北条氏
- A 6. 芦名判官（泰盛）
- A 7. 三浦大多和平六左衛門義勝
- A 8. 父時継は北条時行方、息子の高継は足利尊氏方。
- A 9. 三浦高通
- A 1 0. 三浦時高は京都の將軍家についた。
- A 1 1. 上杉氏（扇谷持朝）の重臣として活躍。
- A 1 2. 北条早雲。その結果は三浦氏の滅亡（1516 年）
- A 1 3. 芦名（葦名）義広（1589 年）
- A 1 4. お万の方
- A 1 5. 紀州藩（徳川の御三家の一つ）
- A 1 6. 美作（みまさか）国（岡山県）勝山藩（現真庭市）
- A 1 7. 島崎藤村

（こいけ きよし）

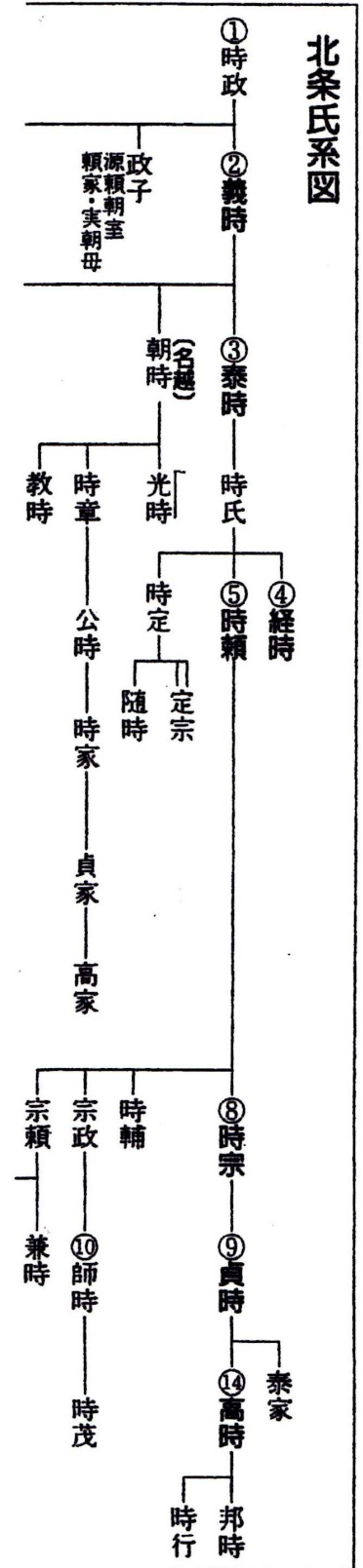
資料1.《三浦一族略圖》

①前九年役 ②後三年役 ③頼朝率兵に協力 ④石橋山合戦で戦死 ⑤和田合戦で滅亡 ⑥宝治合戦で滅亡 ⑦「蒙古襲来絵詞」に出てくる芦名判官
⑧新田義貞に加勢して手柄をたてた ⑨中先代の乱で北条につく ⑩中先代の乱で足利尊氏につき、三浦「介」復帰。新井城初代城主。
⑪天応寺造営奉行(1340年)横須賀郷選見村が本貫地。美作・高田(岡山県真庭市)の三浦氏祖。
⑫頼朝の擾乱で足利直義につき、一時所領没収されるも、のち上杉憲顕の力添えで復活、相模守護に補せられる。
⑬永享の乱で鎌倉方足利持氏を滅ぼす。上杉高救(扇谷氏)の子義頭を養子に迎える。⑭三浦道寸(義同)親子新井城にて滅ぶ。
⑮三浦忠摩守。徳川家光の小姓。下野壬生城主(栃木県下都賀郡壬生町) ⑯美作・初代勝山城主(岡山県真庭市)

桓武天皇——葛原親王——□——平高望——良文——□——忠通——①為通——②為繼——□



※勝山城第三代志摩守前次が、また三浦長門守為積も、大介義明の墓前(満昌寺・御霊神社)に灯籠を寄進している。



安達氏・北条氏関係図

安達景盛

義景

堀内殿

泰盛

盛宗

宗景 (母北条重時娘)

松平禪尼

北条泰時

時氏

⑤時頼

⑧時宗

⑨貞時

⑭高時

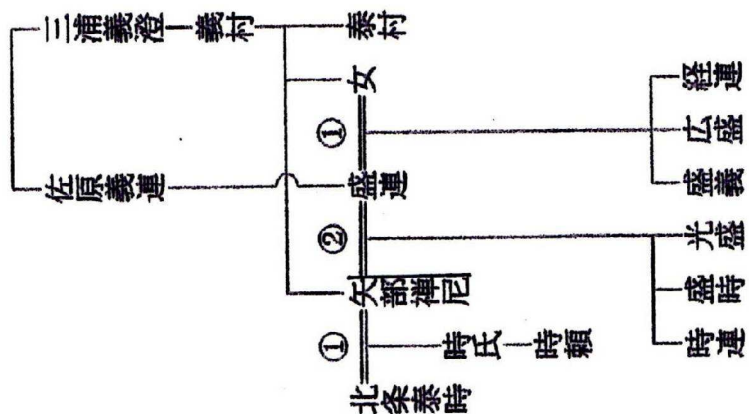
三浦義村娘 (矢部禪尼)

○数字は

○数字は執権の代数

矢部禪尼と北条氏・佐原氏関係図

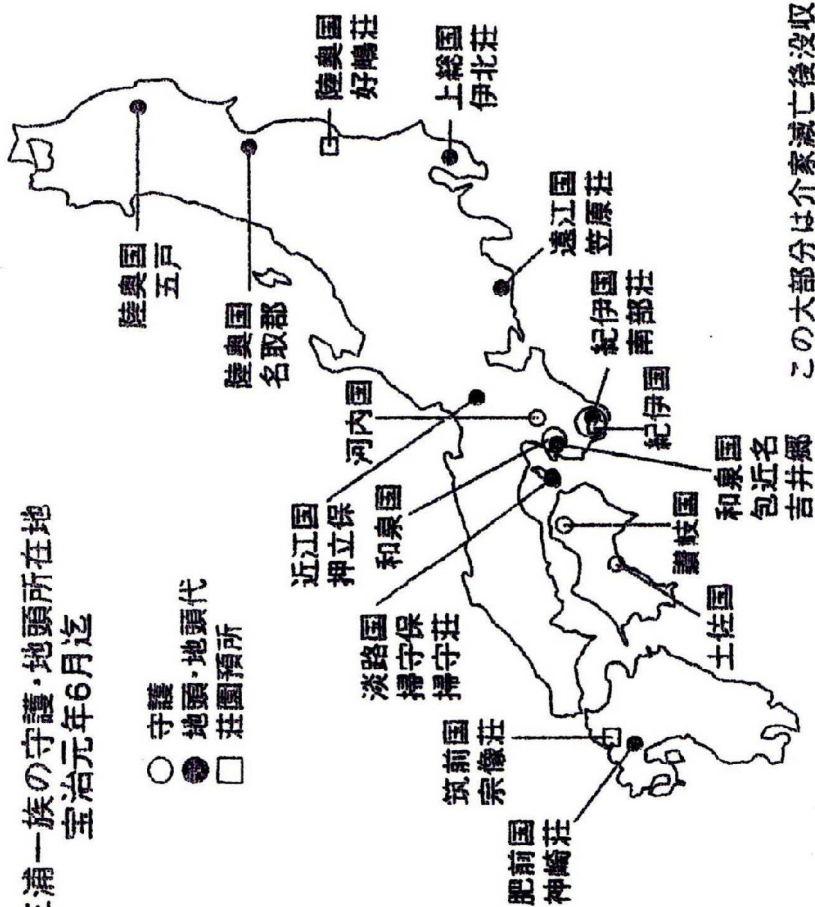
資料 4



資料 5

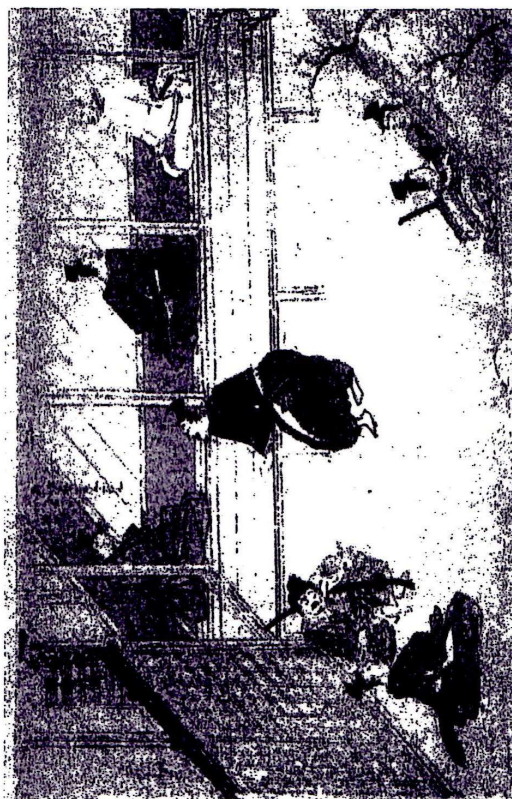
三浦一族の守護・地頭所在地
宝治元年6月迄

- 守護
- 地頭・地頭代
- 荘園預所



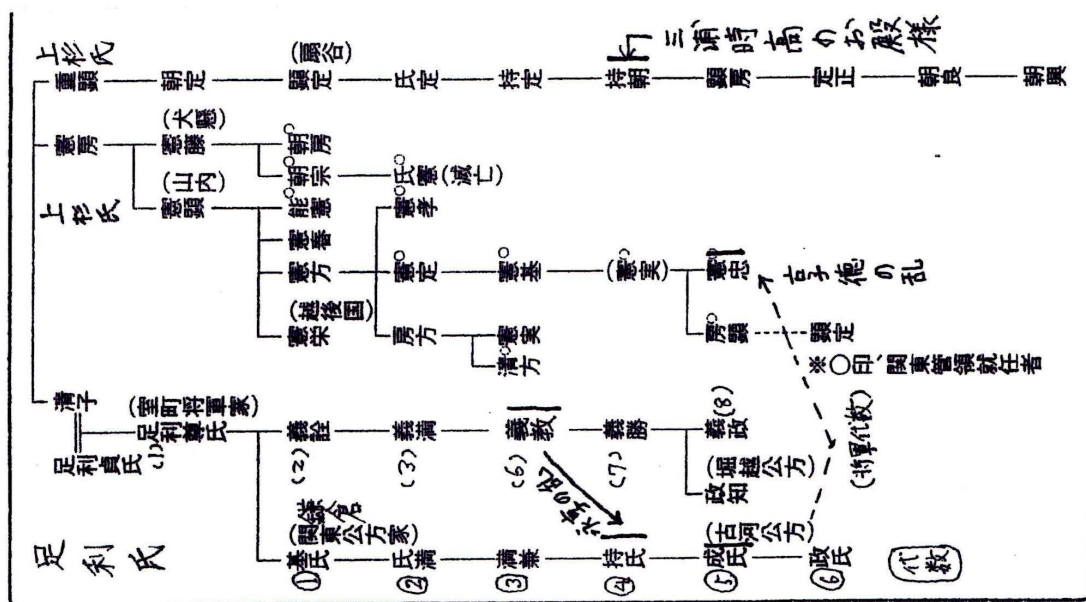
この大部分は介家滅亡後没収された

「蒙古襲来絵詞」登場の芦名判官泰盛



「蒙古襲来絵詞」柱を背に寄りかかっている侍が声名判官（宮内庁蔵）

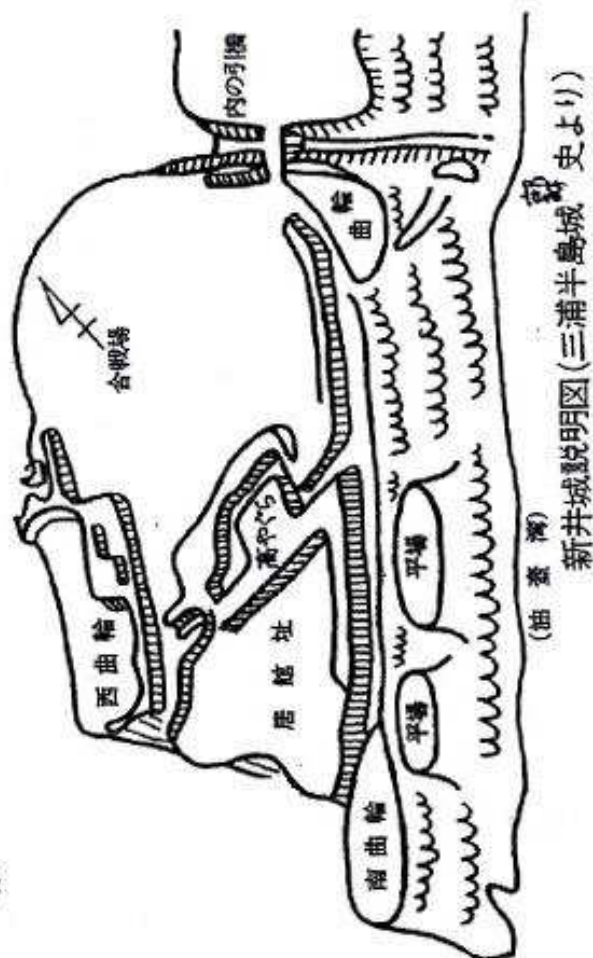
將軍家・鎌倉公方家・關東管領上杉家系図





三浦義同（道寸）肖像と新井城

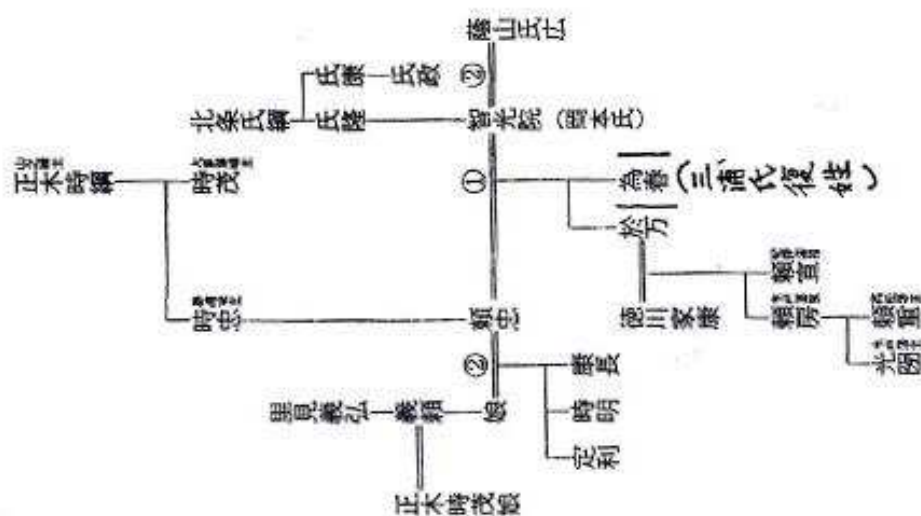
資料 8



新井城説明図(三浦半島城 史より)

正木氏系図

資料 9



内藤千代子の印税

杉本 辰夫（会員）

内藤千代子は明治末から大正にかけて、彗星のように文壇に登場し、彗星のように光芒を放ち、彗星のように消えていった鵜沼ゆかりの女流作家。

幼少時代から鵜沼に住み、31歳でこの地でその生涯を閉じ、今ではすっかりその存在は忘れ去られている。千代子の作品にはモガ（モダン・ガール）的な題材が多く、当時すでに鵜沼の海で「浪乗」に興じたり、北アルプスの槍ヶ岳に日本女性として初めて登頂したり、と千代子自身モガの走りであったのだろう（編集担当）



＊

内藤千代子の印税が当時としては非常に高いものと話題を呼び、それが長いこと伝えられている。これまでの私の調査では、内藤千代子の資料の中で印税に関するものは5件ある。これらを基に千代子の印税が実際、どうであったのか考察してみた。

■内藤千代子の印税に関する資料

- | | | |
|-----------|-----------------|--------------------|
| (1) 田中まさ子 | 内藤千代子のこと | 会誌『鵜沼』39号 |
| (2) 塩沢務 | 内藤千代子（鵜沼の女流作家） | 会誌『鵜沼』41号 |
| (3) 今井達夫 | 鵜沼物語 | 単行本 |
| (4) 森山敬子 | 講演記録『女学世界』に咲いた花 | 内藤千代子
会誌『鵜沼』78号 |
| (5) 内藤千代子 | 生い立ちの記 | 単行本 |

■印税の部分抜き出してみると 《 》内は筆者の注釈

- (1) 田中まさ子 内藤千代子のこと

馬込時代から親しくつき合っていた作家今井達夫さんから聞いた話であるが、かの女《内藤千代子》は女学世界の流行作家で、鵜沼で生れ、鵜沼文人の草分けであろうという。大正14年3月に胸を患って死んだ。《省略》博文館が印税を

1割2分も出していたとのこと、高い印税である。

(2) 塩沢務 内藤千代子 (鵠沼の女流作家)

今井達夫の『鵠沼物語』の内藤千代子に関する部分が転載されている。次の(3)と同じ。

(3) 今井達夫 『鵠沼物語』

私《今井達夫》が文学少年になったころはほとんど筆をすてていたが、戦後かの女の娘さんが見せてくれた博文館大橋新一郎と取交わした出版契約書が、その流行作家ぶりを証明している。それは明治末期の日附になっているが、なんと印税が1割2分と明記してあった。当時の出版事情を詳しく知らない私だが、これは異例とさえいえる厚遇ではあるまいか。

(4) 森山敬子 講演記録『女学世界』に咲いた花 内藤千代子

講演終了後の質疑応答で

森山 私大切なことを一つ落としていました。そこの展示の一番隅です。『エンゲージ』の出版契約書というものがございます。これは本物ですからお帰りにでもご覧ください。その出版契約書に一割二分という印税のことが書いてあります。この一割二分というのが当時としてはものすごい高額ではないかと新聞が書いているのです。

ところがこれをよく読んでみますと一割二分のうち千代子の手許に渡るのは四分なのです。そしてあとの八分は河岡照恵に渡すとなっています。河岡照恵、この人は潮風のお母さんです。『エンゲージ』というのはまだ潮風の生前に千代子の単行本の3冊目ということで、ページ建てから表装まで何から何まですっかり用意して、まるで用意し終わってなくなったという感じで没しているのです。あまりきちんと用意されているものだから博文館も出さざるを得なくて出したという、その経緯も書いてあります。

ですから決して言われるように売れに売れた、がぼがぼと儲かった作家とは思えないのです

(5) 内藤千代子 生い立ちの記

《省略》

その日《潮風を火葬した日》帰宅後、直ぐと善後策についての御相談がございました。一同立会の上、お手まはりの手文庫なども開かれました

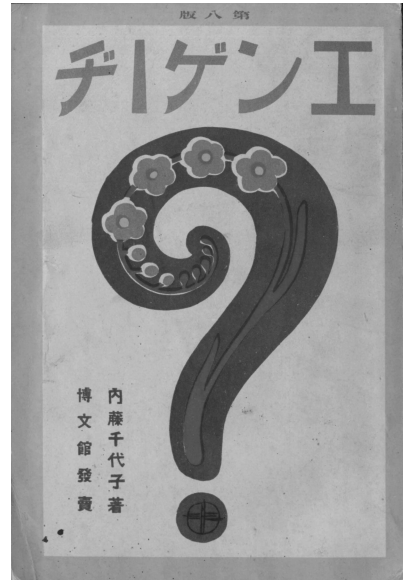
《省略》

私の第三の著書「エンゲージ」については、お気の早い御計画好きな先生《潮

風」、もう定価から頁数、表紙画や広告文の原稿まで見出されましたため、これは是非共完成させるようにと、△△先生《博文館の重役》も御力ぞえ下さいまして、取りまとめられることとなりました。

《省略》

私は出版上のことなどなにも知りませんの。それまでの物もどういふ具合になってますのだから……ただ親戚から補助されてました分、月々二十円というもの、それはこの一月から先生がお立替下さいましたので、物質上で返せる御恩じゃないけれども、けれども、「エンゲージ」の印税、御母堂に八分、私に四分という分配法は、△△先生がたの御配慮でもあり、また私の故先生に対する、せめてもの心ゆかしであった。



■考察

- (1)(2)(3)は印税1割2分が全額千代子の手に渡ったとしての感想である。
- (4)「エンゲージ」の印税の配分で潮風の母親の取り分が千代子の取り分の2倍になっている理由が考察されていない。
- (5)潮風の立替金の存在が配分に影響した。

■結論

「エンゲージ」の印税は

- ・潮風が出版に必要な準備を全て済ませていたこと
- ・親一人子一人だった母親が息子に先立たれて天涯孤独になったこと
- ・千代子の親戚からの援助金を潮風が立替えていたこと

などから千代子4分、河岡潮風の母親8分の割合で配分されたが、この処置は「エンゲージ」に限定されたもので他の出版には4～6分の印税だったと考えられる。

(すぎもと たつお)

くげぬま断章 (IX)

河童忌前のある日に

山上 英男 (会員)

西洋皿一枚と缶詰の簡易生活をしたいという主人の希望により、
東屋旅館経営の貸別荘<イの4号>という玄関を入れて三間の
家に移り、(大正15年夏) 鵜沼の簡易生活がはじまりました。
(『追想 芥川龍之介』・芥川 文)

◆ 貸し別荘<イの4号>

7月は、私が敬愛する作家の命日が多い。

7月9日は森鷗外、10日井伏鱒二、そして芥川龍之介が24日である。

龍之介の命日「河童忌」は、今年80回目を迎えるそうだ。

芥川は鵜沼に縁がある。「蜃気楼」や「鵜沼雑記」「悠々荘」はここが舞台だ。

作品を楽しんでも、私はその作家の私生活についてあれこれ知ろうという方ではない。ただ、作品を理解するうえで必要なことがあるかもしれないので、日記や書簡、関係者の証言などを読むことはある。

先日、芥川夫人・文さんの『追想 芥川龍之介』を再読した。

その中に、「(大正15年夏) 田端の家は暗くて陰気だし、西洋皿一枚と缶詰の簡易生活をしたいという主人の希望により、東屋旅館経営の貸別荘<イの4号>という玄関を入れて三間の家に移り、鵜沼の簡易生活がはじまりました」という一文に再会した。以前読んだ折には、この貸別荘について、作品理解上あまり関係ないことだと思って現地を確かめてみることはしなかった。

そして、いつも散歩で海へ出る道の、適当な所を漠然とそれだと勝手に思い定めていたのである。別荘の佇まいにしても、海近くに今も残る茅葺の小家に重ねて、これも勝手にその面影としていたのである。

それがこのたびの再読で、ふと「退職後ここに住んで10年、毎日近くを歩きながら、そこを正確に知らないほうがむしろ恥ずかしい」と思った。

それで小学校時代の同級生である「鵜沼を語る会」の会長・有田裕一さんに案内してもらった。

商店街から南へ、1間道路とよぶ細い路地を入って行った。そこは今では建物が密集していた。その中の一軒を指して「ここが<イの4号>で、むろん家は建替えられているけど、間数も土台も当時のままですよ」と有田さんは教えてくれた。道に対して変な方角に玄関がむいていた。

秋になって、一家はこの貸別荘から、むかひの二階家に移るのだが、その家は残っていない。

確かに<イの4号>は、『追想』で文さんが書いている「簡易生活」を偲ばせるにふさわしい佇まいではあった。

しかし、わざわざ案内してもらいながら言うのもなんだが、少々幻滅した。

事実を正確に知ることは必要だが、どうも味気ない。

今では、黒松の林も海につづく砂原もない。海浜の侘び住い、といった風情はどこにもないのだ。

先に引用した「鵜沼の簡易生活がはじまりました」に続けて、文さんは「当時の主人の気持ちがよく感じ取れます」と書いて『或阿呆の一生』<夜>の一文をあげているが、それをいま、この<イの4号>辺りから思いめぐらすのは容易ではなかった。

<夜はもう一度迫り出した。荒れ模様の海は薄明かりの中に絶えず水沫を打ち上げていた。彼はこう云う空の下に彼の妻と二度目の結婚をした。それは彼等には歓びだった。が、同時に又苦しみだった。三人の子は彼らと一緒に沖の稲妻を眺めていた。彼の妻は一人の子を抱き、涙をこらえているらしかった。

「あすこに船が一つ見えるね？」

「ええ」

「檣（ほばしら）の二つに折れた船が」>（『或阿呆の一生』43夜）

夫人が「当時の主人の気持ち」といっているそれは、芥川自身の精神の再生と、妻との暮らしのやり直しを求めている、その必死な気持ちのことだろう。

再生とやり直しへの苦しい努力は続けられたが、しかし力尽きた。
翌年、彼は自死した。

夫人によれば、亡くなる前年（大正 15 年）の夏、鵠沼の家へ弟子の渡辺庫輔氏
を呼んで、今まで作った俳句を整理し、清書してもらったという。
その中から、夏の句を 3 句、以下に抜き出した。

蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな
唐黍やほどろと枯るる日のにほひ
松風をうつつに聞くよ夏帽子

とりわけ唐黍の句は、鵠沼の砂地の畑に今も見られる光景である。

◆ 芥川を悼む句と歌

芥川は、こうして俳句もたくさん残した。
専門俳人では飯田蛇笏（だこつ）の作品に感心し次のような文を書いている。
く・・・或時歳時記の中に「死病得て爪美しき火桶かな」と云う蛇笏の句を発
見した。・・・蛇笏の名前に注意し出した。勿論その句境も剽窃した。

癆咳（ろうがい）の頬美しや冬帽子
惣嫁（そうか）指の白きも葱に似たりけり
僕は蛇笏の影響のもとにそう云う句なども製造した・・・>云々。

その蛇笏は芥川の死を悼んで、次の一句をおくっている。
たましひのたとへば秋のほたるかな

また歌人の斉藤茂吉も、次のような挽歌をおくった。
壁に来て草かげろふはすがり居り透きとほりたる羽のかなしさ

（やまかみ ひでお）

史跡めぐり訪問記

寒川文書館と準四国八十八ヶ所のうち寒川地区札所

中島 明（会員）

7月15日（火）、快晴。小田急江ノ島線鵜沼海岸駅改札口に定刻10時10分に会員14名と今回の寒川訪問にご指導下さる圭室文雄明名誉教授、計15名が集めた。藤沢駅でJR東海道線に乗り、茅ヶ崎駅でJR相模線に乗り換え寒川駅で下車し安楽寺へ向かう。

以下順路に沿って訪問先を記す。

（1） 安楽寺

玉園住職の出迎えを受け、本堂に上がり寺の由来や、本尊の大日如来坐像等の堂内に安置されている諸仏について説明を聞く。本堂を辞して帰路右側に弘法大師堂があり3体の大師像が安置されている。それは相模国準四国八十八ヶ所のう



ちの6番「安楽寺」、71番「観護寺」、75番「宝塔院」（この2寺は安楽寺の末寺で明治維新の廃仏毀釈で廃寺となる）。安楽寺は高野山真言宗、山号大塚山、院号は成就院、開創年代は寺伝によれば養老2年(710)で寒川一の古刹。

安楽寺を後にして、近くの寿司店「やまと」で昼食を取った。

（2） 寒川文書館（さむかわぶんしょかん）

4階建ての寒川総合図書館。その4階の文書館へ、エレベーターで上り訪問。高木学芸員より文書館についての懇切丁寧な説明があった。

寒川町文書館は平成18年11月に開館した。寒川町の記録・資料・蔵書等を保管する。因みにその収蔵品は書物3万4000冊、公文書資料3万1400（マイクロフィルム65万コマに収録）とのこと。寒川の公文書の最も古い資料に明治22年寒川村発足の時の議事録がある。行政刊行物も冊子として発行。歴史講座、講演会、イベント等の普及活動も行っている。

文書館内の展示は年2回取り替える。現在は「近世寒川の領主群像」展を開催中である。

寒川地域の11ヶ村の領主は二十数家の旗本（500～8000石程度）で、特に有名

な領主に「大岡忠相」や「田沼意次」がいた。大曲り、小谷地域は一時小田原藩が治めていたという。

普段外部の人は入れない文書資料室にスリッパで入る、資料の劣化防止のため嚴重な空調管理がなされている（温度 25℃、湿度 50%）。消火には水ではなく窒素ガスを使う。



収蔵品で特筆すべきは、神奈川新聞の前身である横浜貿易新聞、横浜貿易新報が明治 23 年 6 月より神奈川新聞の昭和 41 年 10 月まで約 75 年分のコピーが揃っていることである。現在の神奈川新聞でもこれだけ揃っては収蔵されていないだろう貴重なコレクションである。

文書館は誰でも入館し資料を見ることが出来る。また、町民ボランティアによる資料の整理、保存活動が見られ、文書館運営に参考になる事例であった。

（3）西善院

寒川神社の手前にある、いくつかの寺が明治の廃仏毀釈で廃され、うち薬王寺、神照寺等の僧侶が神官となり、神社内にあった西善院が外に出されここに残った。境内左には 62 番「薬王寺」、73 番「神照寺」の大師像が安置されている。

西善院は古儀真言宗で、山号は靈信山。本尊は阿弥陀如来坐像で江戸時代の作と推定される。宮山村「皇国地誌」によれば開基を弘誓法師、創建は寛文 11 年（1761）5 月としている。寒川神社に向かう途中、境内右にある結婚式場参集殿の「レストラン青葉」で皆、飲み物を取って炎暑の中しばしの休憩をした。

（4）寒川神社

寒川神社に参拝した。圭室先生のお話によると、寒川神社は近年参集殿の結婚式事業が不振で、代わりに八方除けを主としたお祓い祈願の人たちが土、日に関東一円から殺到している。祈祷料は最低 1 万円から 3 万円、5 万円とあり、それぞれにカラーのチップのような札が渡され、ときには 3、4 時間も待たされるそうで、大変な神社商法である。それでもその利益を原資にして神社手前で、病院と老人ホームを経営して社会に還元している。



寒川神社は相模国一宮、祭神は寒川比古命、寒川比女命。創建年代は不明だが、1500 年前雄略天皇の時代に幣帛を奉納せられたとあって極めて古い。千数百年の昔から相模の国一宮鎮守として士民信仰の中心となり、源頼朝、北条泰時等がしばしば社参、神宝を奉納し、小田原北条氏も累代社殿の造営、社領の寄進等怠りなく、武田信玄の信仰も厚かった。後年徳川氏もまた代々社殿を再建、社領を奉納する等崇敬奉祀も丁重を極めたという。

ここで、炎暑の中次の訪問先は遠い場所にありこれ以上歩くのは無理ということで、15 名中 7 名だけが予定の準四国八十八ヶ所に行くことになった。

(5) 南泉寺

本堂左側に立派な大師堂があり、天台宗如是庵持と伝えられる城山地蔵(廃堂)から移設された 83 番札所の大師像が安置されている。南泉寺は古儀真言宗で、山号は山王山、院号は妙法院である。「新編相模国風土記稿」によれば、天正年間の創建で開山は善清、開基は「村民五右衛門の先祖」であるという。



(6) 景観寺

住宅街の中を、地図を頼りにたどり着く、本堂も質素な寺。右手に 54 番札所大師像があった。当会の会誌『鵠沼』第 100 号、相模国準四国八十八ヶ所特集」によれば、この大師像は上記の山王山南泉寺より移設されたものとあるが、南泉寺には廃堂になった城山地蔵が安置されており、自分の寺の像が他の寺にあるというおかしなことで、なぜそうなったかは謎である。理屈を言えば城山地蔵と同じ天台宗である景観寺に 54 番があるのが筋と思われる。同書に南泉寺が廃寺と記載されているのは誤りであろう。

景観寺は天台宗、山号は窪田山、院号は宝珠院。天和 3 年(683) 堂を修築した棟札によれば、開山は行基、開創年次は天平年間(729～749)と伝えられている。

以上で予定通りの訪問は終わり、近くの寒川駅より帰途についた。好天に恵まれ炎暑の中の訪問であったが、寺院、文書館、神社、大師像と様々な場所をたどる実り多い史跡めぐりとなった。

終わりに、圭室先生にはご多用中のところ、当会の史跡めぐりに同行下さり、いろいろと有益なご説明、ご指導頂きましたことを厚く御礼申し上げます。

(なかじま あきら)

■鵜沼の道 通りに名前標識を

鵜沼の道は迷路である。袋小路が多い。タクシーの運転手でさえ迷うらしい。ましてや外来者は自分が、今どこにいるのか第三者に伝えることは困難である。

その鵜沼の道も部分的に拡幅されたり整備されつつあるが、その道の通りの名前を周知整備することを提案したい。

いや、おもな通りには名前がついているではないか、そのとおりである。

しからば、鵜沼仲通り、東仲通り、もみじ通りなど地元の人でも知らない人が多い。また現場に標識が無く名前がついていても定着しておらず、半死の状態である。鵜沼も人口は増加しつつあるが最近、引越してきた人には、なじめない。

そこで提案したい。主な通りに、通りの名前を記した標識を出してはどうか。名前は正式名でも通称でもよい。また名前の無い通りには名前をつけ広く使われるように、工夫することであろう。

さしずめ既設の標識に通り名のシールを貼ることからでもよい。予算がある無しではないと思う。老婆心ながら袋小路にまで標識を出す必要はない。（西村 望）

■8月例会の「お話」― 鵜沼海岸の蜃気楼

鵜沼神明在住の宮崎奉之さんが、冬の鵜沼海岸で朝夕に撮り続けた蜃気楼の写真をつんだんに写しながら、体験に基づいた話をされた「鵜沼海岸の蜃気楼」は、興味深いものであった。鵜沼海岸の蜃気楼といえば、高木和男・鵜沼を語る会元会長が、大正15年10月に見たことが報道され、芥川龍之介がこれを題材に短編小説『蜃気楼』を書いたことは有名な話。

蜃気楼とは、見えないはずの風景が水平線、地平線の上に現れるものと思っていたが、これは上位蜃気楼で、鵜沼海岸で見られるものは下位蜃気楼とのこと。冬場に海水に比べ大気が冷たいと、この蜃気楼が現れる。詳しくは、宮崎さんの書かれた『鵜沼海岸の蜃気楼』をご覧ください。この話を聞いて胸のつかえが取れた。というのは、冬の日曜日、丹沢や箱根に出かけたときの帰路、西湘バイパスの大磯の降り口が渋滞する。右手に広がる相模湾に目を転じると三浦半島の先に大きな島が浮かんでいる。あれ、何だ。房総半島でもないし、いつからあんな島ができたのか。そんなことが、何度かあり不思議に思っていたが、宮崎さんの写した写真のなかに同じ情景があった。あれはまさしく蜃気楼、房総半島の洲崎辺りが浮

島のように見えたのだ。三浦半島が浮いて見えることもしばしばあり、これも下位蜃気楼現象とのこと。蜃気楼は大変珍しく、めったに見られるものではないと思っていたが、実はかなりの頻度で、見ていたのだ。（弥）

■サッチャンサラダ

僕が勝手に命名したサラダだ。大根を主体に人参、玉葱、セロリ、パセリ、キャベツ、動物性蛋白質としてはベーコン、ハム、スモークサーモンなど、その時に有るもので良い。大根が主役だから秋大根の代表格、三浦大根が旨くなるこれからの季節に良く作る。レシピ、というほどのものではないが記すと、

- ① 大根直径6～7センチのもの 1/4 を厚さ2mm のいちように切る。人参はやや薄く同じく、いちように
- ② パセリの葉をとった後の芯を包丁の背でたたいて、ベイリーフもちぎって、大根、人参と共にガラスボールで塩にして置く（注 塩加減）
- ③ 重しをして約2時間。①の水気をしぼりレモン薄切5～6枚、セロリの筋をとり斜めに5mm。粒コショウを刻み残りのレモンもしぼり入れ、サラダオイル、塩をボールの中で良く混ぜ合わせ、ハムなども入れ冷蔵庫で1時間なじませる
- ④ 盛り付け時にパセリの芯、ベイリーフの葉を取り除き、パセリの葉を散らす

生前、妻が折にふれ話していたことがある。子どもの頃、「隣の四つ目垣を潜ってよく遊びに行った。阪田寛夫さんといって詩人で小説も書いていた人だったみたい」

実はこの「サッチャンサラダ」は、お隣の阪田家から教わったもので妻のお勧めメニューのひとつになっていた。

阪田寛夫が鵜沼に住んだのは昭和32(1957)年4月、32歳の時。その前年に「なつめちゃん」が誕生している。4歳年上の姉啓子ちゃんが妻の遊び相手だったのであろう。その年の11月に一家は東京練馬区江古田に転居している。

その頃、阪田寛夫は朝日放送東京支社勤務だったが、わずか7ヶ月の鵜沼生活は阪田寛夫にとって何が目的だったのだろう。その2年後、昭和34年従兄弟の大中恩（めぐみ）の勧めで、初めての童謡「サッチャン」を書いている。昭和50年、『土の器』で芥川賞を受賞。阪田一家が鵜沼を去ってから半世紀以上たつが、阪田家から伝承された「サッチャンサラダ」は、いまだ我が家につづいている。（森岡 澄）

『阿部昭の鵜沼風景』

福地誠一の写真を重ね往年の鵜沼を再現

鵜沼ゆかりの作家のひとりに、阿部昭がいる。

阿部昭は自らについて「人気の少ない海辺で育ったことが私の文学の好みを決定的にしたと思う」「人事の葛藤を追うのが本筋であるべき小説を読んでも、私はその自然描写のほうにまず惹かれてしまうような少年であった」「人間を支配する圧倒的な自然と、同じく悠久の時間とに呆然としたのです」と言うように、風土に縛られた作家であり、土地を表現するのを好んだ作家であった。

彼は多くの小説、エッセイの中で自らが育ち、生きた鵜沼のことを繰り返し書いているが、これらの作品は鵜沼に対する一種のオマージュ（讃歌）として描かれているといえよう。



松の緑にあふれた鵜沼も 1960 年代に入り土地開発が進むと、昔の面影は失われていった。阿部昭自身「往時の鵜沼の風光は、今や『福地誠一写真集 鵜沼の五十年』などに僅かにその片影をとどめるのみ」と記している。

鵜沼を語る会は 2008 年 10 月開催の「鵜沼地区公民館まつり」で、鵜沼の作家 阿部昭の鵜沼描写に鵜沼書店の店主で鵜沼の様子を長年にわたり撮り続けた福地誠一の写真の数々を重ね往年の鵜沼を再現。この『阿部昭の鵜沼風景』展は、わずか 2 日間の展示だったので再度、展示をして欲しいという感想が寄せられたが、その機会がないまま今日に至っている。

今号でそのときの『阿部昭の鵜沼風景』展の一部を、再現することにした。

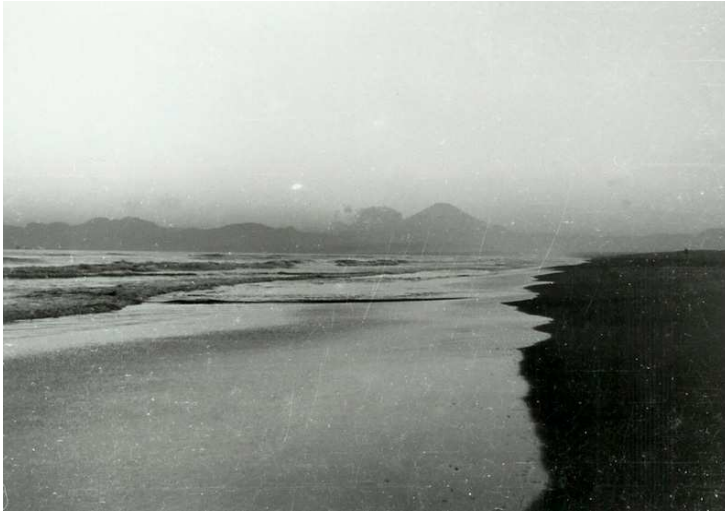


波を枕に

◆海をわが友などと呼ぶのは相当気がひける。私が本職の漁師か、船乗りかヨットの冒険家だったら憚らずにそう高言できるだろうが、わたしの仕事は船には縁がない。私の「波を枕に」は、日夜波の音を聞きながら育って今日に至ったという位の意味である。五十年近く海のほとりに住んでいるという誼みで、この海をちょっと友だち呼ばわりさせてもらうことにしよう。

しかし、本当に有り難い相手のことはふだん忘れてるのが常で、私も一年中ほとんど海のことは忘れて暮らしている。歩いて二、三分だが、朝な夕な浜辺を散歩したりと言うこともない。散歩はずいぶんするけれども、めったに海には出ない。姿は見えないが声が聞える、相手がそこにいるというだけで安心しているのである。いわば居ながらに海を呼吸しているわけで、わざわざ会いに行く必要もないのだ。

（「波を枕に」1982年）



たそがれ

◆ 鵠沼や辻堂あたりは西が海に開いた土地だから、新緑の時はいつまでも日が暮れずになにか苛立たしいものがあるのにくらべて北鎌倉の谷戸では、西側にある山のために、午後の三時になると夏至

の頃でも日がかげろ。だから夕暮れとともに落ち着きがくる。そこが海辺の土地と山の谷あいとは違ふのだ、と。

〈中略〉

この土地の夕暮れどきの気分を楽しむことは少ない。〈中略〉暮れなずむ海ぞいの空にはむしろ不安を掻き立てるものがあるように感じられる。

（「芥川龍之介の鵠沼」原題「たそがれ」1976年）

修練

◆ 湘南の海は本当は冬がいちばんで、日没寸前の海面などは異様なほど美しく、息をのむような瞬間がある。夕日に金とも銀とも赤とも紫とも緑ともつかず、ちりぢりに反映し合って複



雑に揺れ動いている波間を見て、なるほど印象派というのはこれかと納得したことがあったが、残念ながら私の目の力ではそれ以上のものは掴まえ切れない。

（「修練」『エッセーの楽しみ』1986年）

辻堂 海軍演習地

◆ところで、戦争は終わったのにわたしの家では毎日毎日ガラスが割れはじめた。海岸の砂丘で進駐軍の兵隊が日本軍の残した火薬の処理をやりはじめたのである。〈中略〉

その砂丘も、こないだまでは日本の海軍の

演習地だったのだ。子供のわたしはよくそこで空の葉莢をひろった。〈中略〉

昭和三十四年六月、旧海軍演習地が解放されるまでは、相模工大から辻堂団地にかけての海寄りには、見渡す限りの砂丘地帯であったことは、まだ多くの人の記憶に新しいことでしょう。

海軍用地と言っても演習さえなければ、だれでも自由に遊べる。〈中略〉

しかし、強風が吹けば砂嵐となって附近の畑や道路を埋めてしまう。そのきびしい自然環境の中にコウボウムギ、ハマエンドウ、ハマヒルガオ、「防風」等の海浜植物が生きつづけていた。（「日記のことなど」）



鶴沼海岸商店街

◆しかし、もっと発見だったのは、この町には歩き疲れても腰を下ろす場所が一つもないということだった。

（喫茶店等の設備は別として、だ。）東西に一キロ近くはあろうかという商店街のいずれの側、いずこの店先に

も、休憩所一つ、ベンチ一つないことに気がついた。

（『単純な生活』）



桃

◆冬。真夜中。月が照っている。

子供の自分が、母と桃の実を満載した乳母車を押している。

この町から西隣の町に通ずる畑中の一本道は、なにがし台と呼ばれる小高い砂丘

の岡をこえて、ゆるやかな坂道で登り降りする。これは、当時も現在も同じだ。ただ、その頃は道もせまく、舗装されていず、石ころだらけの山道で、両側は深い松林、人家も しばらくとぎれた。

その坂道を、いま、母と静かに下ってくるところだ。やがて、この坂を降りきれば、川にさしかかり、川のゆくては海、木橋の向こうは一面の田圃で、食用蛙の牛のような啼き声や、ふつふつ言う田螺のつぶやきがあたりの空気をふるわせている。もうすぐ、家に着く。 （「桃」1972年）



父と子の夜

◆その夏、わたしはくる日もくる日も暇さえあれば海辺のサイクリングコースを走った。わざわざ日中の炎天の時刻をえらんで走った自転車専用の細い舗装路が、海岸線ぞいに砂浜とド

ライブウェイにはさまれて、わずかに起伏しながらほぼ一直線に伸びている。その果ては熱気にかすんで見えない。終点まで行って帰ってくると往復二十キロあった。

（「父と子の夜」1972年）

単純な生活

◆しかし、文字通りの白砂青松のなぎさでは、くる日もくる日も全裸に近い漁師たちが地引網を悠長に引き、網には魚が銀色にはち切れんばかりで、われわれはよくバケツを提げて貰いに行ったものであること。



と。当時は鰯でも鰯でもいくらでも欲しいだけくれたから貰いすぎて始末に困ることもあったこと。

（雑魚のたぐいは肥料にしかならなかった）

〈中略〉

「ああ、あの頃はよかったすな・・・」などと言え、お定まりの感傷的回顧談になって、往時を知らない世代にはただ馬鹿臭く聞こえるだけであろう。私も自分がそんなに老人くさくなったとは思いたくない。しかし、私は海辺の思い出をむりやり語らされるたびに、最後はきまってこう言いたくなるのである。「だから、昔の湘南はいまや私の文章の中にしかないのです」と。（『単純な生活』）



海辺の人間

◆ちょうど今頃の季節、晴れた暖かい日に子供たちをつれて海岸へ行き、砂浜に寝ころんでいると、おだやかな日にあぶられて、うつらうつらしてくる。しのびよってくる風ももう冷たくはないし、そうぞうしいバカンスの夏はまだまだ先のことで、あまり人影も見あたら

ない。水ぎわで子供たちがはねまわったり石をなげたりしているのをボンヤリ見ていると、その影がだんだん遠のいて行って、逆光のスナップのように小さな点々になり、一瞬ふと自分の子供時代の情景のひとつまを見ているような錯覚をおぼえたりする・・・（「海辺の人間」読売新聞 1971 年 3 月 27 日）



海は大きかった

◆この海は、私が物
 心ついてからこのかた
 三十数年ずっと眺め続
 けて来た海だ。ふるさ
 とに山や川を持ってい
 る人たちが、その山や
 川をながめつつ生い立
 って、いつか異郷にあ
 っても、それらがかれ
 らの内なる山、内なる

川となっていることに気づくように、私もこの海をそんなふうに呼びたい気持ち
 にかられる。 〈中略〉

だから、私は、むしろ海そのものを語ることはやめにして、その鏡に映ったも
 のの影について書くようにしたい。そうすることによって、海の大きいなる力を知
 らせるようにしたい。私の文章が、その一行一行、その一語一語の間隙から、ど
 んな形にしろ、いくばくかの海の明るさ、そのひびき、その匂いが立ちのぼるよ
 うなものでありたい。

（「海は大きかった」1971年）

鵜沼西海岸

◆字下鵜・・・・・・・・。

ずいぶん古い地名だ。
 してみると、この電信柱
 も、きっと三十年から以
 上昔のものであるにちが
 いない。

僕はまたそろそろと歩
 き出した。一このつまら
 ない海辺の町。ここで僕



は、なにしろもう三十何年もすごしてきたのだ。三十何年、この波の音を聞き
 ながら、夜は眠りにつき、朝は目をさました。ここは、やっぱり僕のふるさと
 だ。この土地を、僕はどんなにか愛し、にくむ。

（「鵜沼西海岸」1969年）

字下鰯 最初の家

◆ 鵜沼に三十何年、住んでいる。生まれてすぐにここにつれてこられたのだから、人心地がついたのもこの海のほitoriであった。

〈中略〉

その間いちばん長くいたのは、今では西海岸と呼ばれている字下鰯という、ごく海岸に近い一角であった。そこで十数年、波の音を聞きながら少年時代を過ごした。その魚くさい地名は、朝な夕な、地引網を曳きに家の前をぞろぞろと通って行った、老若男女の漁師達のことを思い出させる。幼い僕にはあらくれた彼等の半裸姿が、絵本に出てくる赤鬼のように、おそろしかった。

その時分の鵠沼は、そうした半農半漁の土着の住民を除いては、海水浴場のある避暑地であるか、病人をかかえた一家の転地先であった。僕のおやじが昭和の初年に家を建てた頃は、あたりいちめんスイカ畠であったという。砂地のせい、夏は蚤が多かった。

僕の家のおそばには「芥川さん」の家があった。（「鵠沼西海岸」）

短い形式

◆戦前の姿を比較적으로とどめていた別荘地の鵜沼、戦争下では疎開地でもあった鵜沼は、外来者にとっては相変わらず大衆的な海水浴場であり、それには戦前も戦後もなかったからである。古くから住んでいる人間の目には、この土地での季節の交代にはたった一つの



パターンしかないようなものだ。シーズンとシーズンオフあっけない夏の二ヶ月がすぎてしまうと、あとはすさんだ空虚がただよう。冷ややかな鋼色の海、さびれてまた草叢の下に消える砂の小径、閉ざされた娯楽場と・・・いったものに、子供の私はいつもその空虚感をかきとって胸がいたんだものだ。

(「短い形式」1972年)



松林

◆松の木の多い土地で、松林に囲まれて暮らしてきたが、そのことを取り立てて考えたことはなかった。それがいまごろになって気になり出したのは、これも年齢のせいにながなかった。（「松林、海、日光」『海燕』1985年）

◆湘南・辻堂海岸の拙宅東隣の二

百坪の土地には、この間まで大小十数本の松があった本来は海辺の防風・防砂の松だが、よく育ったのは十メートル前後にもなっていた。そこへ去年の八月のある日、東京からきちんとスーツを着こなした大手企業の社員がやってきて、「ここは板橋の歯科医が買った、家を建てるので松は全部伐る。」と言った。私は自分のでもない松の運命に暗然とした。（朝日新聞 1988年2月5日夕刊）

川

◆いずれにしる、引地川は僕の川だった。ボクが物心ついた頃はもう戦争がはじまっていて、蜃気楼どころじゃなかった。そんなものを見に出かけたという閑人の話もきいたことがなかった。あの小説家が渡ったという橋は、もちろん木橋にちがいないが、川口から何番目の橋であるかはっきりしない。（中略）



僕の家があった町内から路地をまっすぐ海のほうへ行ったら、木橋がかかっていた。これは木材が腐って、隙間だらけで、橋の下から仰ぎ見ると、渡って行く人の足なみが一步ごとに木洩れ日のようなちらちらする影になって、たどれた。このボロ橋には、竜宮橋というりっぱな名前がついていた。海のほうから順に、鵠沼橋、竜宮橋、日の出橋、・・・ときて、第一の白い橋を除けば、どれも粗末な木製の橋だった。（「川」）

記憶と回想

◆昭和四十六年十一月一日は、私にとっては記念すべき退職第一日であった。その日、まず私がしたことは二時間ほどの外出だった。快晴の暖かな午後で、足の向くまま



にぶらりと海岸へ出てみると、鵜沼から江ノ島のほうへ行ったあたりでは地曳網を曳いている最中で、海面におびたしい鵜が群れていた。実際何年ぶりかで見える光景だったが、それも、勤めを離れた自由の身で目にするからよけい珍しく映ったのだろう。そのあと、レストハウスで夕日を眺めながらコーヒーを飲み、往時芥川龍之介ら大正文士が寄り集うた東家があった近くを通って帰ってきた。漠然とながら私も昔のことを思い出して来るようであった。

(「記憶と回想」『全作品』の余白に「1984年」)



水のほとりで

◆日没。

北側の窓から見ると、夕ばえで西の山なみの線がハッとするほど迫ってきて、こんな海辺の町ではない何百キロもはなれた山奥の盆地にでもいるような錯覚におちいる。だがち

よっと首をめぐらしたとたんにその幻想はこわれる一磨りガラスにでも映したような青ぐろい夏富士がちゃんとあそこに控えているから。

それで私は思い出した・・・・昔住んでいた家から子供の足で十分ほどのところに山口屋という小さな雑貨屋があり、そのわきに汚い郵便ポストが立っていた。夕方よく使いで葉書などを出しにやらされた。その山口屋の角から田圃ごしに西の山の空を見ると一面に広がっていた夕やけ、そいつが私の頭のなかではいつも絵本の夕やけのページとごっちゃになっていたことを思い出したのだ。

(「水のほとりで」1975年)

性に合う辻堂海岸の空気

◆藤沢市に住んで五十三
年、そのうち四十年は鵜
沼にいた。だが、昔は松林
と原っぱばかりだった鵜
沼も、だんだん建て込んで
住宅地として整備されて
くると、私には面白くな
くなった。そこで、まだ少
しでもそんな面影を残して



いる辻堂の、それも海のすぐそばへ移った。三つ子の魂百までか、私にはやはり砂地と、強風と、海鳴りと、三拍子揃った、荒涼たる空気が性に合っているらしい。
(「性に合う辻堂海岸の空気」『はまぎん』1988年2月発行)



ふらんす

◆快晴の日がつ
づき、朝に夕に富士
の影が浮かび出る、
すぐそこに、手にも
とれるように。空の
青さに誘われて、砂
浜に出てみる。波は
ほとんどなく、なめ
らかな海面がつや
つや光って、その上
をどこまでも歩い

て行けそうである。真正面に、伊豆の大島がくっきりと見える。太陽はちょうど頭の上にある。雲ひとつない真昼どきである。

波打際を、病気上りらしく見える老婦人が娘さんかお嫁さんと二人で貝殻を拾いながら歩いている。向こうのほうから、黄色いトレーニング姿の若者が一人、ゆっくり近づいてくる。人影といったらそれだけだ。湘南の海はいまがいちばん美しい。
(「ふらんす」1986年)

渚にて

◆私はもともと湘南海岸に居住しているが近年はもっと海寄りに仕事部屋をこしらえたので、この原稿もそこで波の音を聞きながら潮風に吹かれて書いている。波打際までゆっくり歩いて四、五分である。



しかし、その割には海を見ることは少ない夏は別として、シーズンオフには一と月に一回ぐらい、それらもちらっと見ただけで、さっと引き揚げる。あとは姿は見えずとも、すぐそこに気配がするからそれでじゅうぶんといったぐあいである。

今日は五月十八日、日曜日だが、久しぶりに砂浜まで降りて行ってみる。

〈中略〉

相変わらずあたり一面ガラクタが目につくが、やがて七、八月ともなればとてもこれぐらいではおさまらない。ひっきりなしに打ち寄せるちりあくたに加えて、海水浴客が棄てて行くビール缶やジュース缶、弁当殻の山だ。昔だってゴミは出たのだろうが、折箱、竹の皮のたぐいが当節では皆ビニールとか発泡スチロールだから始末が悪い。こわれたバケツや洗面器、御婦人のピンカーラに怪獣のプラモデルの破片、子供が親の目をかすめてこっそり買って吸う、いかにも毒々しい安物ジュースの容器など、ことごとくビニール製である。煮ても焼いても食えない。

（「渚にて」1975年）

言葉とゴミ

◆私が住む湘南海岸は、いまやサーフィンの名所であると同時に、ゴミの名所でもある

かつては白砂青松がうりものであった砂浜に、あらゆる種類のゴミが散乱している。空き缶だの、空き瓶だの、プラスチックの容器だの。一升瓶が割られて、破片が突き出ているのもある。その上をはだしで走りでもしたら、大怪我すること請け合いである。

（「言葉とゴミ」読売新聞 1979年6月15日夕刊）

春の夜

◆私は海辺に住んでいるので、街の音からは遠い。嵐の前後などは海が鳴るが、ふだんは耳につかない。その代わりに海沿いの国道を往来する車の音が絶えない。ことに深夜、暴走族が通過する際は、百雷一時に落ちる大音響、と形容するも誇張でない。その合間には、パトカーのサイレンや救急車のホーンもまじる。



(「春の夜」『婦人百科』昭和 61 年 5 月号)

浮き雲

◆夏休みも終わると、人の波が退いた海岸は急にがらんとしてしまう。あちこちに塵芥の山がのこるばかりで、浜辺の砂からも熱気が失せ、早や秋の風がしらじらと首すじを吹いて過ぎる。やれやれ、今年もシーズンは終わったか、という感じが、海水浴場のある町に住んでいると、ことのほか強い。

(「浮き雲」『エッセーの楽しみ』1986 年)

◆今宵もかわが寝ねむころ

単車らの鼠花火の寄せ来たらむか

戯れうたの一つもひよいと口をついて出ようほどに、湘南の海岸は夏冬を問わず、暴走族の名所である。もはや、風致地区だの何だの言っている段ではない。彼らの夜ごとの祭典が、どのようなものであるか、知らない人には一と晩泊まって行って貰うしかない。

ただでさえ寝苦しい季節に、明け方など耳もとでやられると、それっきり眠れなくなる海辺の住人の間に、怒り心頭に発するものがあって当然である。

(「風の音楽」日本経済新聞昭和 62 年 8 月 9 日付)

晩夏

◆「今年はどうやら一度も海にはいらずに終わってしまいそうだ」と言うと、「こんな海の傍にいて？」と不思議がられるが、案外そんなものである。ちょっとばかり海水が恋しくないでもないが、サーファーの



若者男女に占領された砂浜や、あたり一面の塵芥の山などを目に浮かべると気後れがしてしまう。

〈中略〉

こんなふうに、シーズンオフの到来を、おとなしく、辛抱強く待っている私みたいな海辺の住人もいる。よそから来る人に通せんぼするでなし、その期間家を空けてどこかへ逃げ出すでもない。第一、海辺の夏は実にあっけない。あっという間の短さである。子供の頃、四十日の夏休みが果てしなく長く、それだけでも一つの別の季節のように感じられたのが嘘のようである。

八月も半ばになると、雲の様子がにわかに変わってくる。

〈中略〉

すると、それまでよく磨いてあった青空の鏡になんとなし点々と曇りが出てくる。そのうち今度は白粉でも吹きつけたような白味が増してくる。それがもう秋の雲なのである。毎年、この自然のサインを見つけると、今を盛りと夏を楽しんでいる人にはお気の毒と思いつつ、私はひそかに喜ぶ。

この空気の変化と、日中の風の感触におやと思うのは同時のようである。照りつける日はまだまだ衰えないのに、地上をわたる風に冷やっとさせられるのは、熱いお茶に氷を入れて飲むようなもので、身体の内外的感覚が斑になったような、奇妙な具合である。「晩夏」というのはもうあまり流行らないようだが、美しい漢語の一つで、私は言葉も好きだが、季節そのものを好む。猛暑は閉口だが、晩夏はいくら長くてもいいような気がする。

（「晩夏」『エッセーの楽しみ』 1986年）

あとがき

■ 鵠沼を語る会は 2008 年 8 月、『阿部昭の鵠沼風景』をテーマに学習講座を開催、講師は鵠沼海岸在住の島本千也氏。鵠沼育ちの作家・阿部昭が「鵠沼」をどのようにとらえていたか、「鵠沼」という場所をどのように表現したか、阿部昭にとって「鵠沼」とは何だったのかということ、阿部作品から読み取った話であった。同年 10 月、公民館まつりで、講座で取り上げた阿部昭の鵠沼の記述に、福地誠一の写真を重ね往年の鵠沼を再現した。島本氏は「阿部昭の鵠沼風景とは、阿部昭の原風景としての鵠沼である。彼の作品は鵠沼に対する一種のオマージュ（讃歌）として描かれている」と述べている。一方、「だが、1970 年代後半に入ると鵠沼の海はゴミで汚染され、川はドブ川と化し、松林は伐採され砂原は住宅地となり、景観は破壊される。このような環境の変化、子供のときの記憶が次々と失われていく現実に対し、阿部昭はく昔の湘南はいまや私の文章の中にしかない」と金切り声に近い叫び声をあげている」「鵠沼に対するオマージュとレクイエム（讃歌と挽歌）のふたつを書くことにより、阿部昭は自らの使命を果たしたのではないか」とも述べている。島本千也氏の詩華集 阿部昭の鵠沼風景は、会誌『鵠沼』第 97 号、98 号に掲載。同氏は現在、鎌倉・湘南地区のフィールドワークをもとに、執筆活動を行うなど地理・地域研究者として活躍中。

■ 阿部昭は昭和 9(1934)年 9 月に広島で生まれ、翌年の春には鵠沼海岸に移った。幼稚園、小中高と藤沢の学校に通い、東大卒業後はラジオ東京（現 TBS）に勤めた。その傍ら、文筆活動にいそしみ昭和 46(1971)年 10 月、TBS を辞し専業作家となり数多くの小説・エッセーを残した。作品の舞台の多くが鵠沼である。「阿部昭全作品」（福武書店）と「阿部昭集」（岩波書店）がある。平成元(1989)年 5 月没。

■ 福地誠一は明治 42(1909)年に東京・深川で生まれ、関東大震災後の大正 13(1924)年に鵠沼に移住。鵠沼海岸に土地を求め昭和 7(1932)年、鵠沼書店を立ち上げた。趣味で始めた写真はフィルム現像、引伸ばし焼付けまですべて自分でやり、昭和初期から鵠沼でこつこつ撮り溜めた作品を昭和 58(1983)年、鵠沼公民館で『鵠沼の五十年』展と題し展示した。写真展開催には鵠沼を語る会・高木和男元会長らの尽力があり、展示写真は一冊の写真集『鵠沼の五十年』として出版された。昭和 60(1985)年 5 月没。

■ 参考文献：「阿部昭の鵠沼風景」上・下（会誌『鵠沼』第 97、98 号） 「阿部昭集」 福地誠一写真集『鵠沼の五十年』 写真：福井誠一撮影

構成・文責：竹内 広弥（会員）

昭和35年頃の鵜沼風景

砂ばかりの記憶

守谷 俊博（会員）

昭和35年4月に藤沢市立鵜沼小学校5年生に、名古屋市から転校して来た頃の55年も前の鵜沼界隈の風景記憶である。

親爺の愛知県での農業用水プロジェクトが完了し神奈川県に居を構える事となり、気候温暖な鵜沼の地に引っ越して来た。名古屋市には4年間居住したので関東の言葉はすっかり悪名高い「名古屋弁」となり、転校のクラスでの挨拶が大いに盛りあがった事を鮮明に記憶している。連続の記憶の中では、ある特定の時期だけを覚えている事は稀だが、転校後の鵜沼界隈の記憶は覚えている。だが、子供の記憶なので理解が異なる事が有れば、読后感想でご指摘頂きたい。

まず強烈な鵜沼の印象は「砂の上に広がる別荘地」である。この頃で舗装されていた街路は鵜沼海岸商店街ぐらいで東端は静岡屋青果店まで。現在の鵜沼海岸1丁目には舗装された道は有ったのだろうか？ と云うのもこの頃は鵜沼地区に下水幹線を敷設する為に、地中に排水用の鉄パイプを打設しポンプで汲み上げ地下水位を下げていた。その後路面を剥いで幹線用のヒュウム管を敷設、しかし3m程掘削しても青白い砂が出て来るだけで、地層の概念の無いどこまで掘っても砂という地べたに住む事となった。当然、通学時にはズック靴の中には砂が入り込み、帰りついた時は砂だらけになった。そのうち靴に砂が入らない「摺り足」で歩くことで、砂を巻き上げない歩き方を学んだ。

鵜沼界隈に舗装道路が皆無だった様な記憶だが、それは下水幹線を敷設する為に道路を掘り返してしまった結果、砂だらけになっていた鵜沼に転校して来たのかは、はっきり覚えていない。翌年、建築していた家屋が完成したが、完成間近に事件が起こった。それは木造壁にペンキを塗った夜に大風が吹き未だ掘った砂が安定状態に無く、舞い上がった砂が乾燥していないオイルペイントに付着してしまった。「サンドペーパー状」になり、これで建て替えるまで窓枠がブツブツだった。

下水放流施設は未整備だったので、庭に穴を掘り下水を地中に吸収させるもの

であった。使う内に吸収が悪くなり、隣に新たな穴を掘った。こんな方法は砂の上に住むからこそ可能な下水処理だった。それから数年後には下水の枝管が我家の前まで届き、トイレ水を含む生活排水が直放になった。

その頃は広大な庭に自然の池が有って、そこにアヒルがいる様な家が散在していて未だ宅地開発とは無縁の地であった。こんな千坪単位の土地も東京オリンピックの頃から段々と住宅地に変貌して行った様に思う。今、湘南海岸道路の北側は立派な自然石敷きの歩道であるが、当時は鵠沼橋から旧江の島水族館まで黒松が植えられた舗装なしの砂浜同様の小径が国道に沿う様に続いていた。しかしオリンピック事業なのか全ての松は切り倒され、コンクリート平板の歩道に近代化して行った。

昭和35(1960)年の東北地方に甚大な被害を与えたチリ津波は相模湾にも及んだ。津波到来後、海岸に出てみた。当時、現在の地引網「殿網」あたりの砂浜は標高が高く、その西側は旧引地川の河口で低地だった。特に津波の被害は無かったが、その殿網前の丘陵部に台風でも潮が溯る事は無かった所まで溯った痕跡が有った事を記して、小生の風景記憶としたい。

(もりや としひろ)

昭和36(1961)年の鵠沼海岸



作成：鵠沼郷土資料展示室 内藤喜嗣

馬込文士村 ―あの頃、馬込は笑いに充ちていた―

土岐 臣道(会員・郷土博物館友の会会員)

今井達夫の原稿が「鵠沼を語る会」から大田区立郷土博物館へ寄贈されたのは、平成 23 年 10 月 18 日の事でした。あれから 3 年、ようやく馬込文士村の特別展が今、開催されています(9 月 6 日～10 月 19 日)。会場は郷土博物館の 2 階と 3 階を使用して展開され、2 階の会場入り口のブースでは、馬込文士が描いた「馬込文士村」と題して、馬込に暮らした



今井達夫コーナーには寄贈された原稿類が展示文士たちの作品を展示・紹介しています。そのタイトルを列記しますと、尾崎士郎の小説「空想部落」、廣津和郎の「昭和初年のインテリ作家」、榊山潤の「馬込文士村」、そして今井達夫の「馬込文学村二十年」です。このブースでは 4 台の展示ケースのうち 2 台を今井達夫の紹介に充てており、「鵠沼を語る会」の解説パネル ～今井達夫が結んだ鵠沼と馬込～ では、未発表原稿についての説明及び、「鵠沼を語る会」から郷土博物館へ原稿を寄贈する場面の写真を載せ、原稿類寄贈の経緯が紹介されています。

また本会場に入って最初に目にするのは、「馬込文士村」の中心文士、と題した 6 人の文士たちの展示スペースです。ゆったりとした贅沢な展示ケースに今井達夫が取り上げられています。文士村の誰もが認める主人公尾崎士郎と宇野千代、文士村の村長と呼ばれていた吉田甲子太郎、庭づくりと散策を愛した室生犀星、文士村の名付け親の榊山潤、そこに並んで今井達夫が中心文士として名を連ねたのです。これは過去には考えられなかったことです。今回の特別展は馬込文士村に住んだ 42 人の作家や芸術家を紹介していますが、その中には鵠沼に住んだ子母澤寛、日夏耿之介、廣津柳浪、真船豊、室伏高信、和辻哲郎、等もそれぞれ独立して展示・紹介されています。今回の特別展の魅力を高めているのは、今井達夫であり、冊子「馬込文学村二十年」であります。3 年前に鵠沼から馬込に贈られた原稿が、今井達夫の背中を押して、今や「馬込文士村」の中心文士としての評価を得るようになりしました。

(とき しんどう)

死者来訪

今井 達夫

梅雨の晴れ間をみて、芝原は庭に下りた。十坪ほどで庭というほどではないけれども、ちょっと怠けるとすぐ雑草がはびこる。それを始末するためであった。克明な性格の持ち主である。

ふと生垣のそとに人影がうごくのをかんじて、しゃがんだまま顔を向けると、生垣の上から吉村の顔がこちらを向いていた。何年ぶりかだが、ほとんど変わっていない。しかし、吉村は芝原に視線を向けていなかった。芝原は立ちあがって声をかけようとする、吉村は視線を宙にうかせたまま音もなく歩み去った。おかしいなと思いながら生垣から上半身を乗り出して視線であとを追ったが、もう姿は見えなかった。

そこで夢はさめた。妙な夢だなと眉をひそめた芝原は、頭がはっきりして来ると、ぞっとした。吉村は二年ほど前に故人になっている会社の先輩であった。

どうして吉村の夢など見たのか、あれこれと考えてみても心当たりはなかった。何年か前、吉村が停年退職して会社を去ってから、一度も逢ったことがない。会社にいたころだって、部はちがうし特に親しくしてもいなかったし、まして訪問をうけたことはなかった。

気味のわるい夢である。迷信ぶかい方ではないが、わるい前兆のような気がする。翌日会社の医務室へ行って、診察をうけてみた。

「健康ですな。御心配無用です。理想をいえば、五キロか六キロ体重をへらすことです。運動不足でしょう。」

「ゴルフをすすめられているのですが。」

「結構。しかし、ゴルフは毎日というわけに行かない。歩くのですな。それも老人くさくゆっくりとでなく、青年的にぐいぐいと。」

「青年的にぐいぐいとですか。」

芝原は気分が明るくなり、このアドバイスにしたがおうと思った。

それにしても、どうしてあんな夢を見たのか。芝原は綿密に研究しはじめた。二年前吉村が死んだあと、彼の部下だった社員たちがこんな会話をかわしていたのを、偶然耳にしたことがあった。

「停年退職というのは怖い問題だな。吉村さん急におとろえはじめたじゃないか。ひまになってのんびり暮らしているのに、血圧も高くなっただけ。逆の話だね。」

まだ若い社員たちの訝る気持は当然だが、これは吉村だけの特例ではなかった。急激な生活の変化がそういう現象をもたらすことは、無数に例があった。

「早いとこ転身を考えておけば、吉村さんもまだまだ持ったにちがいないね。停年はわかっていたのだから。」

「重役になる可能性があったから、いけなかったんじゃないか。転身を考えたりする気配がわかれば、上の方の心証をわるくする危険がある。」

「それにあの直後停年が二年のびたことも、ショックだったろうな。それから四月とたっていなかった。」

「直接の原因は、それだろうね。」

その会話は耳にのこったが、それは吉村の側の事情であり、事態であった。芝原は気の毒にかんじたが、恨まれる筋合はなかった。夢のなかに吉村があらわれたのはもちろん芝原のなかにあるものが招いたのであって、それをつきとめる方が大事である。

医務室へ行ったのは、そのためであった。むしろ吉村の好意ある警告とうけただけだ。しかし、健康の心配はなかった。それならば、何を警告してくれたのだろう。

停年退職、健康のおとろえ、それにつづく死の到来、それが気にかかっていたことは否定しない。が、その不安は解消した現在である。会社が子会社をつくり、出向社員として役員になる内命を最近うけたばかりの芝原であった。転身を考える必要はなかった。子会社の役員になれば、すくなくとも二年の任期を二回約束されているのである。うまく行けばそれはさらに延びるかも知れないし、そのあとも監査役という閑職に滑り込む可能性があった。それから先のことを考えなければならない時期ではなかった。

芝原は用心深くほかの病院で精密検査をうけてみたが、結果は同じ事であった。ところが、その夜、また故人のあらわれる夢をみた。今度は奇妙な夢であった。

あらわれたのは一年ほど前に死んだ中学時代の同級生で、洋画家の古屋だったが、奔放な性格と生活の持主で、通夜の席でまああれもあれだけ勝手気ままな一生を送ったのだから自分では諦めがつくだろうがと、さまざまな噂ばなしの出た男である。

どういう用事があったのかわからないが、芝原は古屋の画室にいた。芝原ひと

りのところに、古屋がドアを開けてはいつて来たのである。古屋は生きているところとまったく同じ態度だったが、芝原は彼が死んだことを知っていた。

「おや、どうしたんだ。君は死んだじゃないか。」

「ウン、ところがだね、一周忌の日に死ぬやつがいると、それに代わってもらって帰って来ることが出来る仕組みになっているんだ。死ぬのは××だ。オレは帰って来ることを希望したのさ。」

××という姓は、芝原の知っている男だが古屋は知合ではない。おかしいなと思ったとたんに、古屋の一周忌が翌日であることを芝原は知った。

「しかし、君の命日は今日ではないじゃないか。あしただぜ。」

「いや、一日ぐらいどうだっていいんだ。」

古屋はちょっと工合わるような笑いをうかべながら、早口で断言した。相変わらず、死んでからもぞろっぺえな奴だな、芝原は苦笑いとともに関手の顔を見た。

ぞろっぺえという俗語は、生前の古屋にかぶせられていた評語であつた。そこには非難のパアセンテージよりも、彼の愛嬌を許す部分の方がおおきかつたのである。

しかし、夢はそこで切れた。夢のなかで芝原は夢とは悟らなかつたが、理性は働いていた。そんな話は聞いたことがないと首をかしげたが、実際に古屋が姿を見せているので逆らえなかつた。半信半疑だつたというより仕方がない。古屋は在世中とまったく同じ姿と表情の持主だつた。工合わるような笑いも、そういう場合の早口も古屋のものであつた。

夢がさめてから、芝原はこの奇妙な夢の意味を考えてみた。

奇妙な夢だが気味のわるい後味が残らなかつたのは、生前の古屋の人柄のゆえであろうし、芝原側からいえば精密検査を受けた安心感がもたらした心持の余裕のおかげだつたろう。それにしてもどうしてこんな夢を見たか、それは生前の古屋の生活態度を羨んでいた潜在意識が、そういう形であらわれて来たのにちがひなかつた。

前にもいつた通り、古屋は奔放な生活をつづけ通した。洋画家という職業のためだけではなく、洋画家のなかでも特にぬきんでいてた。こつこつと会社づとめに精勤をはげむ芝原にとっては、埋めがたい間隔のある生活史の持主であつた。芝原はしばしば眉をひそめたが、胸の奥底では羨望を禁じ得なかつたと、今さらながら自覚しなければならぬのである。

が、そういつてはちがうところがあつた。奔放な生活は、彼の性格が許しそう

もなかった。芝原が羨むのはその奔放な生活が導く放埒な部分であった。連続する奔放な生活をまねる自信はないが、部分的な放埒な行動ならばいつでも終止符が打てるという条件があって、危険から自分を守ることができる。それが羨ましいのであった。しかし、芝原はそれを経験することなく今日に到った。古屋の夢を見たのは、その欲求不満が潜在していたからに違いなかった。

「これからでも、遅くないかも知れない。」

夜なかの目ざめの寝床で、芝原はつぶやいてみたが、実現しないであろうことを自覚した。

しばらく日をおいて、こんどは六七年前に死んだ長い付合の老人の夢を見た。どういうわけか芝原は、彼の住んだことのない家に住んでいて、座敷に立っていると、板塀の向うをその老人が歩いて来るのを見かけた。老人は板塀に添って歩き、すぐ見えなくなった。板塀の角をまがったところに門があると、芝原は知っていた。妻を呼んで、その老人が訪ねて来ることを告げた。

「玄関に見えたら、どうぞといってすぐお上げするんだ。座敷にいる。」

ひどく遠慮深い老人で、三十年近いつきあいだのに、芝原が玄関に出ると、ここで失礼するといいかねない。在世時代よりやせて前かがみに歩いていた老人に、そういう遠慮をさせたくなかった。

予想通り玄関で押し問答があってから、老人は座敷へ通った。つよくはないが酒が好きで、飲むと活気づく。芝原は妻に目くばせで酒の支度を命じた。しかし、夢はそこまでであった。酒を汲みあわなかったばかりでなく、ほとんど言葉をかわさなかった。しゃべった言葉も日常の挨拶だけで、記憶にきざみつくものはなかった。

目がさめると、習慣通り芝原はその夢の意味を考えた。三十年近いつきあいが、彼が故人になったあとの消息は知らない。老人には妻がいたが、子供はなかった。そのせいもあるだろう。その後のつきあいは途絶えてしまった。

老人と知り合ったのは、芝原が会社に入って間もなくであった。アパートの近所の銭湯でときどき顔を合わせた老人、そのころはまだ老人といっっては気の毒な年齢だったが、その津村という人物はしかし二十歳以上年長だったにもかかわらず、いつとなく親しく付き合うようになった。そのころから津村は遠慮ぶかい態度の持主で、どこか折れ目正しいところがあった。

銭湯でしきりに顔を合わせるかと思うと、しばらく逢わない日がつづく。日焼けをした顔いろはビルディングの事務所で働いているとは思えない、芝原は興味

をひかれて訊いてみた。

「ヤマ師ですよ。年中全国の山を歩きまわって、石を探しているんです。一度お出かけください。実物をお目にかけましょう。」

訪ねると津村は芝原にとっては得体のしれない鉱石を並べて、ひとつひとつ説明を加えた。その方面には知識のない芝原には理解しにくい話だったが、津村の情熱は十分かんじることができた。

「あなた。御自分ばかり熱心におなりになって、芝原さん退屈なすっていらっしゃいますよ。お支度ができました。芝原さん、何もございませんが、どうぞ。」

「そうそう。さ、芝原さん、座敷の方へどうぞ。手を洗って来ます。」

津村は並べ立てた鉱石類を手早く縁側のはしに片よせ、立って行った。

意外な歓待をうけて芝原はとまどったが、これが三十年つきあうきっかけになり、親しくなるにしたがってその歓待が特別の意味を含んでいないことを知った。津村は富山県の旧家の出で、客をもてなすのはしきたりみたいなものであった。芝原の生家も埼玉県の上野から二時間半ばかりの距離にある旧家だったから、そういうしきたりみたいなものを容易に理解できた。

津村の家は五つ間ほどの小じんまりとした借家だったが、家のなかはきっちりと整頓し、塵ひとつ落ちていないのも細君の癖性のせいかと、次第にわかって来た。身だしなみがいいというかそのままよそを訪問しても差支えないと思われる身なりは芝原の訪問のための用意かと思ったが、そうではなかった。その後不意の訪問の場合にも、細君は丁寧に化粧をほどこし、乱れた姿を一度も見たことがなかった。

芝原は間もなく結婚し、やがて大阪支店へ転勤になったが、津村夫婦とのつきあいは変わらなかった。年齢もちがい職業も無関係なのに、どうしてそんなに親愛感を寄せてくれるのか、東京にいたあいだにそれとなく訊いてみたことがあった。

「やはり由緒のある家系のかたでないと、気持ちが合いませんものか。」

津村の細君は、津村家とかの女自身の家柄に誇りを抱いているのが、はっきりわかった。

「いいかただけれど、すこし権式張って（ママ）いらっしゃるのね。」

芝原の新妻は、大阪へ来てからはじめて、そんな感想を漏らした。家庭を持ったはじめ、津村夫婦を招いたときの感想であった。津村の細君は頭の回転がはやく、終始津村をリードし、津村は唯々諾々としたがっていたのである。もっと飲

みたような津村を急き立てるように辞去させるのに対して、津村は抗弁することなくしたがった。齒がゆいほどの従順さであった。

大阪在勤中、芝原は一度津村の訪問をうけた。珍客を家に伴い、大いに歓待することを妻に命じると、大きくうなずいて同意を示した。津村に対する細君の態度に、若干の義憤めいたものをかんじていたとおぼしい。

その日の津村は、今までの彼とすこしちがっていた。自宅へ誘うといつもの遠慮する表情を見せたけれども、それは習慣的なものにすぎなくて、背負っていた大きなリュック・サックから各地の名産や小瓶の日本酒を幾種類か取り出し、芝原の妻へのみやげの品とともに差し出したところをみると、期待していたにちがいはなかった。津村は快活に飲み、快活にしゃべった。生き生きと表情がうごき、彼の家を訪ねたとき彼ら夫婦を招いたときと別人の印象であった。

「これと見当をつけた山のなかを、ひとりで歩きまわっているときの気分はなんともいえないなあ。人生、いや、宇宙の悠久なものと直にふれあっている気分ですなあ。」

こんな感想をもらしたのは、はじめてであった。

「それで山の仕事はいつからおはじめになったのです？ はじめから志しておいでだったのですか。」

「三十すぎからです。これでも三つ四つの会社につとめて、ホワイト・カラアの経験もありますが、どうも性に合いませんでね。」

「じゃ、結婚されたあとになりますね。年中お留守がちで、よく奥さんが御承知なさいましたね。もっとも、しっかりした奥さんだから——」

「まったくです。後顧の憂いはありませんからな。しかし——」

津村はそこで言葉を切ってから

「——しかし、ひとりっきりになりたいときもありますからなあ。」

特に語気が変化したわけではなかったが、芝原は衝撃をうけた。細君と一緒にいない津村と飲んだのは、これがはじめてであった。今まではいつも、進退についてイニシヤチイヴを細君にとられて、その手綱のままにうごいている津村きり見ていない芝原であった。

その当時は、恐妻という言葉はなかった。しかし、彼は典型的な恐妻家のひとりであったろう。

津村の夢を見た芝原は、寝床の上でしばらくのあいだ追想にふけたが、自分はどうなのかと先夜見た古屋の夢と思い合わせた。要するに、芝原は津村と古屋

の中間の生ぬるい状態に身をまかせて長年くらして来たというより仕方がないだろう。芝原はふたりの娘を結婚させ、末の息子の大学卒業を控えている。粗末だけれども自分の家を建て、停年退職後の見当もついた、そういう境遇に安心している。

芝原は津村と酒を飲んでおしゃべりをしなかったのを、残念に思った。夢のなかの津村に向けた質問が数々うかんで来た。知りたいのは、津村が生涯を満足して死んだかどうかであった。こんど夢を見たら、積極的に質問をしたいと思った。芝原に欠けているのは、そういう場合の積極的な態度だった。そのおかげでたしかに平穩無事な五十年を過ごして来たにちがいない。しかし、誰でもいい、こんど夢のなかにあらわれた人物に向って、芝原は積極的になろうと自分をはげました。

次の夢は種類がちがっていた。芝原は中学五年生にもどっていた。この夢は、ここに並記していいかどうかかわからない。その年彼はある私立大学をうけて落ち、受験準備に没頭していた。半年先にせまっている受験には、どうしても成功しなければならない立場にあった。同級生のひとは、去年その大学に四年生からパスしていたのである。競争相手というほどの意識は胸の底ふかくに沈んではいたが、親友であった。

小学校六年のとき東京から転校して来た同級生は、県の技師の息子であった。東京風の空気を身のまわりにただよわせている同級生は、芝原のあこがれであった。同じ学校に入りたい希望は大学へ進む話が出たときからつのり、二年遅れてもあとを追いかけたかった。

芝原は日曜ごとに正味三時間かかる東京神田の予備校へかよった。大学生になった同級生は、東京の親戚に寄宿していて、芝原が予備校の帰りに立ちよると、純粋な友情ではげましてくれた。その友情を嬉しくかんじ、ますます都会的雰囲気身を身につけた相手に対するあこがれが芝原のなかで成長した。

しかし、芝原の夢にあらわれたのは、同級生ではなかった。芝原の家には三つか四つ年長の女中であった。正味三時間かかる予備校がよいのためには、四時前に起きなければならない。はじめ母親が世話をしてくれたが、カゼをひいて寝ついたのがきっかけになって、その女中が代ることになった。牛のような顔をし牛のように太っている女中を芝原は嫌っていた。

ある夜ふけだった。突然、背後から坊ちゃんと押し殺した声をかけられ、狼狽して振り向くと知らないうちに女中が忍びこんでいた。

「坊ちゃん、そんなことしなさらなくてもいいんですよ。」

芝原は固くなって、声が出なかった。受験準備の勉強に打ちこむと、堪えがたい情欲の昂進にさいなまれ、ひそかに自慰をおこなう習慣がついていた。その途中を発見されたのである。牛のような顔に情欲をたぎらせて、女中がせまって来た。

そんなことが幾度か繰り返された。芝原は嫌悪で嘔吐をもよおしたが、日がたつと女中が忍んで来るのが待ちきれなくなって、戸外にある便所に行く振りをして、女中に聞こえる足音を立てて出て行った。幾度目かに母親に見つかって女中は暇を出されたが、芝原はこわれもの扱いをされ、母親の注意が身近に濃くなっただけであった。

こんどの受験に芝原はパスした。ほかにも願書を出したが、そちらはどうでもよかった。あこがれていた同級生と同じ大学にはいりたかったのである。発表を見た芝原はその足で同級生を訪ねた。

「おめでとう。よかったね。」

祝福してくれたあとで、同級生は云いにくそうに意外なことを口にした。暇を出された女中から妊娠した旨の手紙が来たといった。

「それは嘘だったよ。調べさせたんだ。受験準備の気分をそこねてはいけないと思ったからだまっていたが、もう安心だから一応含んでおいてもらおうと思ってね。」

顔いろを変えた芝原を、友情のこもった声でなだめてくれた。暇を出された女中は、その後なんともいって来なかった。この女中が夢のなかにあらわれたのである。

あらわれ方は前の三つの夢とちがってあのころに時代がさかのぼっただけでなく、あの出来事の再現に似た情景のなかであった。ほかに取柄はなく、それだけが目をみはらせた白い肌が芝原の前で大きくひろがり、おどろいているとそれは無限にひろがって行った。その中心にいまわしいまでに密生したものが黒々と貼りついている。よせと叫んで、芝原はとびのいた。その叫びが夢から解放し、芝原は目をさました。

なぜこんな夢をみたのか、解釈がつかなかった。生涯のうちでいちばん厭な記憶だった。忘れてしまいたいと願い、戦後同級生が病死して以後はその記憶から解放された気持で、次第にうすれさっていた。母もすでに死に、あの出来事を知っているのは、彼自身と相手の女中だけであった。芝原はぎょっとした。それで

は、あの女中も死んだのか。死者だけが夢にあらわれる近ごろの現象にしたがえば、あの女中もそんな形で死んだことを証明したのか。迷信じみた解釈であることはわかりきっている。あるいは、あの出来事を知っている者の喪失を願う心持が潜在していたのであろうか。

この二年ほど、芝原は妻と寝室を別にしている。そういう欲望が全く失われたわけではないが、彼も妻も安眠の方を大事にするようになっていた。こんな種類の夢を見る生理的理由はない。

芝原はあのとき同級生の配慮に感謝したが、同時に、これで一生頭が上がらないとかんじた。そしてまた同時に、過失のない生活を送らなければならないと決心した。その決心はたしかに貫いた。勤勉な学生として、勤勉な社員として、現在停年退職を前にして子会社の重役になる運びにこぎつけた。はじめから一流会社の役員になる希望を捨てていた芝原にとっては、子会社設立は望外の幸運だった。はじめの夢にあらわれた吉村はその幸運に置き去りにされた。わずかな年齢差が分かれ道であった。

しかし、それは幸運ばかりではない。芝原の質実で勤勉な勤務がもたらした結実であった。それを身につけさせたのは、あの出来事であった。その意味では、あの失敗に感謝しなければならない。ひいては牛のような顔をした女中にも。はたしてかの女は死んだのであろうか。芝原は次の日曜日に郷里を訪問して、それとなくかの女の生死を探ってみようかと考え、大いそぎで否定した。

芝原の胸の奥底には、釈然としないものが引っかかっていた。彼自身にはそれがなんであるかわからなかったが、全面的に感謝できないものもややもやと動いていた。質実なのは彼の性格であった。しかし、それが全部ではなかった。中学生のころ彼のなかには野心的な一面もあった。その一面を封じ去ったのが、あの出来事であった。停年退職、子会社への横すべり、この平穩無事な生涯のコースが全面的に満足すべきものか否かと問われれば、抵抗がある。

感謝ではない、必要なのはかの女に対する憎しみであった。感謝という弱気な、死に引きずりこむ引力になる。夢のなかへの死者たちの来訪は、このへんで断ち切りたい。断ち切らねばならぬ。それを機会に新しい生き方をしてみようではないか。芝原は闇のなかで目を据えた。死はいつ訪れるかわからない。

「鵜沼を語る会」活動の記録

(平成26年4月～平成26年9月) 総務担当

平成26年4月例会 4月8日(火) 10時～12時 25名出席

司会進行 有田会長

議題1 会誌108号 — 出席者に席上配付した。欠席者には従来通り別途配付とした。

議題2 『鵜沼物語』 — 昨年度プロジェクトチームで取り組んだ冊子が完成したので会誌と併せ配布した。欠席者には別途配布とした。

議題3 平成26年度活動提案・要望について — 例会通知発行配付廃止、会誌記事のホームページへの掲載を検討議題として出され、その他会員からの提案が要請された。

お話 — 『宝治合戦とその後の三浦氏』 小池会員 (本号本文を参照)

運営委員会 4月29日(火) 8名出席

第28回総会・5月例会 5月13日(火) 10時～12時 27名出席

司会進行 中島会員

総会 — 有田会長、井出鵜沼市民センター長の挨拶の後、配付された議案書の審議を行なった。平成25年度事業報告、収支決算報告、今年度の事業計画、予算が提案され、全会一致で承認された。

今年度事業計画案

公民館まつり展示、史跡めぐり、鵜沼の古い地名の由来など古老に訊く、会誌『鵜沼』の記載内容のホームページへの掲載検討、その他、相応のテーマが発生した都度、追加して行く。

5月例会

議題1 『鵜沼物語』 — 制作した150冊の配布先予定の紹介があった。

議題2 会の運営について — 有田会長から会員の高齢化に伴う会運営への協力依頼等があり論議した。例会のお話、例会通知の廃止、史跡めぐり、会誌バックナンバーの有効活用について意見・要望を出し話し合った。

運営委員会 5月27日(火) 11名出席

平成26年6月例会

6月10日（火）10時～12時

20名出席

司会進行 佐藤弘会員

「お話」の代りのフリートークで、話し易い雰囲気にするため机をコの字型に配置した。

議題1 例会通知の廃止 — 今回から毎月の案内を廃止し年間例会カレンダーを配付する案を採用。従来通り配付希望の意見も出されたが、当面続けてみることにした。但し変則的な日程の時は配付する説明がされた。

議題2 会誌のバックナンバーの有効活用について — 700冊程度のバックナンバーを保管しているが、有効に活用しながら在庫を削減する方法について話し合った。

お話 — 『昔の遊び、行事』フリートーク 司会進行 森岡会員

我々も次世代に伝承していく必要があり、併せて公民館まつりにつなげられればという思いも含め自由に発言してもらった。今後も話し合いを重ねていくことにした。

運営委員会

6月24日（火）

9名出席

平成26年7月例会

7月8日（火）10時～12時

20名出席

司会進行 岡田会員

議題1 歴史散歩について — 7月15日に寒川文書館他の歴史散歩の計画内容が案内された。

議題2 会誌バックナンバーについて — 会員の希望者に頒布する旨の紹介がされた。今後は会誌発行部数の削減についても検討することにした。

議題3 ホームページのソフト購入について — ウィンドウズの今までのソフトの保証期限の関係上、新たなソフトを購入する旨が了承された。

議題4 公民館まつりのテーマについて — 『こどもの頃の遊び』に決定した。来場者参加型とする、制作および当日対応は従来以上に会員の参加協力を要請された。

お話 — 『こどもの頃の遊び』フリートーク 前月に続き自由に発言の場を持った。

歴史散歩 7月15日（火） 15名出席

寒川文書館、寒川神社、相模国準四国八十八ヶ所の安楽寺、西善院、
南泉寺および景観寺を廻った。（本号本文参照）

運営委員会 7月29日（火） 8名出席

平成26年8月例会 8月12日（火）10時～12時 15名出席

司会進行 有田会長

議題1 歴史散歩の報告 — 7月15日実施された寒川文書館他の歴史散歩の
報告がされた。

議題2 公民館まつりについて — 進行状況が報告された。

議題3 会誌109号について — 原稿の集結状況が報告された。

お話 — 『鵜沼海岸の蜃気楼』を鵜沼神明にお住まいの宮崎奉之氏に映像を交
えてお話していただいた。（本号本文参照）

運営委員会 8月26日（火） 12名出席

平成25年9月例会 9月9日（火）10時～12時 17名出席

司会進行 綿谷会員

議題1 会誌109号について — 最終の掲載原稿状況が報告された。

議題2 公民館まつりについて — 進捗状況の報告、おもちゃが紹介された。

議題3 『馬込文士村特別展』 — 大田区立郷土博物館で開催中。パンフレッ
トが配付され展示の様子が報告された（本号本文参照）

お話 — 郷土資料展示室にて展示中の『鵜沼海岸駅周辺の商店街』を、内藤会
員の解説付きで見学した。

運営委員会 9月29日（月） 9名出席

新しく加入された会員（4月から9月の間に入会 敬称略）

関根 次郎（せきね じろう）

参考： 会員総数 57名（9月末日現在）

編集後記

- 酷暑の夏も8月末に、一気に涼しくなりました。暑さと共に広島の高雨による土砂災害と、異常な気象状況でした。9月に入り、10月開催の「公民館まつり」の準備で忙しくなりました。前号を以って岡田哲明編集長がその任を辞したので、今号は運営委員が編集委員となり原稿集め、レイアウトなどの編集作業を進めました。6年半編集作業に携わってきた岡田会員、お疲れさまでした。
- 巻頭を飾った「鵠沼海岸の蜃気楼」は8月例会で筆者の宮崎奉之さんが話されたことを、自身が撮られた写真を織り交ぜレポートにしてくれました。宮崎さんは、鵠沼神明在住。東京都の職員として永年、東京都健康安全研究センターで食品衛生の分野を担当、現在は専門学校の講師をしています。写真活動は都庁写真部に所属していた頃から続けられ、藤沢市展の写真の部で市長賞を受賞したこともある素人離れしたものです。今年度も『蜃気楼の朝』が秀作賞に選ばれました。記事中には掲載されていませんが、『お話』では映写されました。
- 「鵠沼と小泉八雲」は有田裕一会員が、かつて関東大震災前の東屋の建物・庭園の造りを調べた概略図を参考に八雲一家の鵠沼で過した様子を書いています。
- 「宝治合戦とその後の三浦氏」は、小池清志会員が4月例会で話されたことを会誌用にまとめてくれました。昨今の鎌倉の賑わいを目の当たりにすると、昔のこととはいえこのような合戦があったことは、なかなか想像し難いことです。小池会員は鎌倉ガイド協会に所属し、鎌倉地域の史跡ガイドとして活躍中です。
- 杉本辰夫会員が以前から調べていた「内藤千代子の印税」について、投稿されました。千代子は、まだまだ謎の多い作家です。
- 今回で9回目となる山上英男会員のエッセー「くげぬま断章」は、芥川龍之介が自死する前年に家族と過した鵠沼での簡易生活を取り上げています。その舞台となった鵠沼海岸2丁目の貸別荘<イの4号>の場所を、訪ねてのことです。
- 7月に行われた史跡めぐり「寒川文書館と準四国八十八ヶ所のうち寒川地区札所」の訪問記は、中島明会員が担当。夏の暑さが伝わってくるレポートです。
- 「阿部昭の鵠沼風景」は6年前の「公民館まつり」で展示した材料を基に、紙面上に構成したものです。まだ自然に溢れたよき時代の鵠沼の様子を再現しました。
- 半世紀以上前に鵠沼に越して来た当時の様子を、自分の風景記憶として守谷俊博会員が書いています。あらためて鵠沼は砂地なのだ、と実感しました。
- 馬込文士村特別展が9月6日オープン。当会が寄贈した今井達夫の原稿類や冊子『馬込文学村二十年』が展示されている様子を土岐臣道会員がレポート。
- 14回目になる今井達夫遺稿は『死者の来訪』。今井の遺稿も長編が多くなり会誌で紹介できる作品に限られてきました。

『鵜沼』 第 109 号
平成 26 年 9 月 30 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>